

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1987

5



聖徒の道

1987年5月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：マリオン・G・ロムニー、ハワード・W・ハンター、ボイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン

顧問：ヒュー・W・ピノック、ジョン・H・グロバーグ、ジェームズ・M・パラモア、デレク・A・カスパート

編集長：ヒュー・W・ピノック

教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集主幹補佐：ジャン・U・ピンボロー

子供の頁編集：ダイアン・プリンクマン

レイアウト/デザイン：N・ケイ・スティーブンソン、シャリ・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン

マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1987年5月号第31巻第5号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA0573JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1987 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先……〒106東京都港区南麻布5-10-30/末日聖徒イエス・キリスト教会管理本部経理課 ☎03-440-2351(代表)●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎0427-96-2820

●——も く じ

あなたのゴリアテに立ち向かう

トーマス・S・モンソン

2

家庭訪問メッセージ

ホームメーキング：すべての女性のための機会

7

ジュリー・ジェイコブス：

オランダにともるひとつの明かり

ルース・ハリス・スウェナー

8

ボイド・K・パッカー長老：卓越した教師

ドン・L・サール

10

質疑応答(子供の虐待)

カールフレッド・プロデリック

16

南アフリカの聖徒たち

マージョリー・E・ウッズ

18

聖餐の祈りについて思うこと

ジョン・S・タナー

24

アビー・ルース

デブラ・ハギンズ・ベアード

29

——若人のために——

群れに戻る

ハートマン・レクター・ジュニア 33

私たちの祈りの中に

カーステン・クリステンセン 36

7億5,000万人の中のひとり

インドに住む末日聖徒の青少年

ベティ・ヘイル 38

知られざる幼年期、少年期、成年期

ブルース・R・マッコンキー 41

創造力と末日聖徒

クロフォード・ゲイツ 45

チャーチニュース、各地のたより

子供のページ(別冊付録)

石で打ち殺されたステパノ

「聖典からの物語」より 2

サラヘ

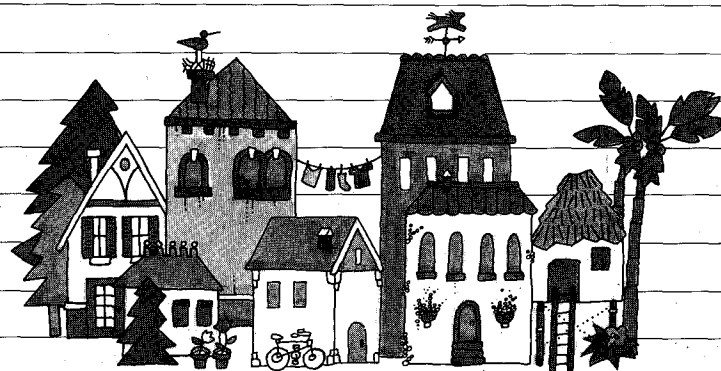
グレッグ・ラーソン 4

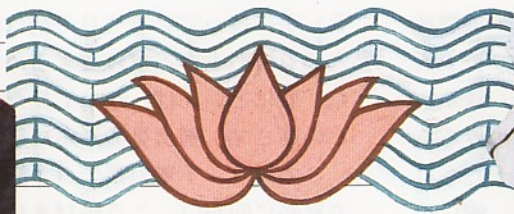
おもちゃばこ

8

表紙：南アフリカ共和国ドラケンスバーク山脈の中の田園風景

写真提供：南アフリカ観光協会(本号「南アフリカの聖徒たち」参照)







あなたのゴリアテに 立ち向かう

第二副管長
トーマス・S・モンソン

聖地と呼ばれている地域で、幾世紀にもわたり繰り返されてきた戦いの中で、紀元前1603年のエラの谷の戦いほど人々の心を捕らえるものはありません。(サムエル上17：2 参照) 谷の片側では、ユダの中心地とヨルダンの谷を目指して進軍しようとするペリシテ人の軍隊が、その反対側では、サウル王が家来を従えて戦列をしいていました。

歴史家によれば、対立する両軍の力は、兵の数や戦闘技術の面ではほぼ互角だったようです。しかし、ペリシテ人には、秘中の秘として外に漏らすことのなかった、鉄から強力な武器を作る技術がありました。金床に打ちつけるハンマーの音や空に立ちのぼる煙は、サウル王の兵士たちに恐怖心を植えつけたに違いありません。なぜなら、銅に比べ鉄の武器の方がはるかに威力のあることは、兵になりたての者にさえもはつきりわかる事実だったからです。

当時は、軍勢が対峙した場合には、代表の戦士がひとり出て、相手の軍のだれかに一騎打ちを挑むということがよく行なわれました。この種の一騎打ちは1度や2度のことでなく、それまでもかなりの前例がありました。特にサムソンがさばきづかだった時代には、戦争の勝敗はこのような一騎打ちによって決められていました。

巨人

しかし、このときのイスラエルに関する限り、状況はかんばしいものではありませんでした。最初に一騎打ちを挑んだのが、ガテのゴリアテと呼ばれるペリシテ人だったのです。大変な大男で、古い記録には身の丈が3メートルだったと書かれています。彼は青銅のかぶとをかぶり、うろことじのよろいを身につけていました。(サムエル上17：5) 手に持っているやりの柄は非常に重く、どんな力ある人でも持ち上げるだけでよろめいてしまうほどのものでした。盾とはといえば、かつて見たことも聞いたこともないほどの高さで、剣は見るからに恐ろしげなものでした。

このペリシテ軍の兵士(4節参照)は立ってイスラエルの軍勢に向かい、こう叫びました。「なにゆえ戦列をつくって出てきたのか。わたしはペリシテびと、おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえたちから、ひとりを選んで、わたしのところへ下ってこさせよ。」(8節)

彼は、自分がイスラエルの軍に負けたら、ペリシテ人は皆イスラエルの家来になるが、勝った場合は、イスラエル人を皆ペリシテ人の奴隷にすると宣言してきたのです。ゴリアテは大声で叫びました。「わたしは、きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わたしと戦わせよ。」(10節)

彼は40日間、この同じ言葉を叫び続けました。一方、イスラエルの人々は、ただただ恐れおののくばかりでした。彼らは「避けて逃げ、ひじょうに恐れた」(24節)と記されています。

「しもべが行……きましょう」

しかし、そのようなことに恐れることもたじろぐこともなかった人がいました。それどころか、彼は次のような叱責にも似た鋭い質問を浴びせて、イスラエル軍の士気を高めようとしたのです。「わたしが今、何をしたいのですか。……だれも彼のゆえに気を落してはなりません。しもべが行ってあのペリシテびとと戦いましょう。」(29, 32節) こう語ったのは、羊飼いの少年ダビデでした。しかし、その語り口は、とうてい羊飼いの少年とは思えないものでした。彼は予言者サムエルの按手により油を注がれ、主の霊を受けていたのです。

サウル王はダビデに言いました。「行って、あのペリシテびとと戦うことはできない。あなたは年少だが、彼は若い時からの軍人だからです。」(33節) しかしダビデは譲らず、サウル王の武具を身にまとい、大男に立ち向かう用意をしました。しかし、武具のために思うように動きがとれないことを知って、彼はそれらをすべて脱ぎ捨てました。そして代わりに羊飼いの道具を手に取り、近くの川からなめらかな石を5個拾ってくると、それらを袋に入れました。そして手に石投げ器を持つと、ペリシテ人に近づいていきました。(40節参照)

そのときのゴリアテの驚きようは、非常に印象的なものです。「つえを持って、向かってくるが、わたしは犬なのか。……さあ、向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじきにしてくれよう。」(43-44節)

主の名によって

ダビデは答えて言いました。「『おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。』

きょう、主は、おまえをわたしの手にわたされるであろう。わたしは……イスラエルに、神がおられることを全地に知らせよう。またこの全会衆も、主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであって、主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである。』

そのペリシテびとが立ちあがり、近づいてきてダビデに立ち向かったので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、ペリシテびとに立ち向かった。

ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびとの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつむきに地に倒れた。

こうしてダビデは石投げと石をもってペリシテびとに勝ち、ペリシテびとを撃って、これを殺した。」(45-50節)

戦いが終わり、勝利を手にしたのはダビデでした。こうしてダビデはその名をとどろかせ、運命とも言える国家の英雄としての道を進んでいくことになったのです。

予言者サムエルを通して主から聖なる任務を授けられた羊飼いの少年としてダビデを思い起こす人もいます。また、豪勇の戦士として彼を覚えている人もいます。幾多の戦いに輝かしい勝利を収めたダビデを賛美する女性たちの歌が記録に残されています。彼女たちはこう歌いました。「サウルは千を撃ち殺し、ダビデは万を撃ち殺した。」(サムエル上18:7) あるいはまた、彼を靈感された詩人、イスラエルの偉大な王として思い描く人もいれば、神の律法を破り、人妻であるバテシバを奪った人と見る人もいます。彼はその夫ウリヤを死に追いやる算段までしていたのです。(サムエル下11参照) しかし私は、ダビデを、だれもがしり込みした勝ち目のない戦いに挑戦し、ガデのゴリアテという巨人に立ち向かってイスラエルの名を救った勇氣と信仰を具えた義人として見たいと思います。

私たちがゴリアテに出会うことはないだろうか

自分自身の生活をよく顧みて、どれほどの勇氣と信仰を具えているか、考えてみてください。皆さんの生活の中にゴリアテはいないでしょうか。私の生活の中にはいないのでしょうか。皆さんと皆さんの望んでいる幸福との間にゴリアテが立ちふさがっているということはないでしょうか。皆さんの中のゴリアテは剣を持ったり、大勢の人前で聞こえよがしに皆さんを侮り、決断を強要するようなことはないでしょう。また、身の丈が3メートルもあるような巨人でもないはずですが、それは古代のゴリアテ同様に強力な力を持って現われることでしょう。またそのひそかな挑戦の言葉は、私たちを恥じ入らせ、当惑させるものかもしれません。

人によっては、たばこがやめられない、酒がやめられないといった執着が、ゴリアテとなっていることもあるでしょう。抑制のきかない舌、また、貧しい人やしいたげられた人を軽べつするような自己中心的な考えがゴリアテになっていることもあるかもしれません。ねたみ、食欲、恐れ、怠惰、疑惑、不品行、高慢、肉欲、利己心、失望など、これらはどれも私たちの生活の中のゴリアテになり得るものばかりです。

私たちが出会う巨人は、私たち自身が心の中だけで願い、



私 たちに求められている道は、時として達成できないように思えることもあれば、まったく望みがないように思えることもあります。しかし、私たちは決して自分だけの力で、生活の中のゴリアテと戦うものではありません。

手をこまねいて待っているだけでは、大きさも力も弱まることはありません。むしろ相手は威力を増し、皆さんを従えてしまうでしょう。

私たちの心の戦いは、ダビデが見せてくれた戦いに劣らず重要なものです。敵の力も決して弱くはありません。しかし、私たちは全能の神の助けを身近に受けることができるのです。では私たちはどんな行動をとればよいのでしょうか。昔のダビデのように、「私たちの目的は義」であるはずで、私たちは失敗するために、あるいは誘惑のわなのえじきになるためにこの世にいるわけではありません。成功を収めるためにいるのです。それには私たちの巨人、ゴリアテを征服しなければなりません。

5つのなめらかな石を選ぶ

ダビデが小川に行き、慎重に5つのなめらかな石を選んだように、私たちも力の源である主のみもとに行く必要があります。皆さんは自分の進歩の機会を阻んで幸福を奪おうとしているゴリアテを打ち負かすために、どのような磨かれたなめらかな石を選ぶでしょうか。次にそれらの石をいくつか提案したいと思います。

勝利を収めるには、まず勇気という石を欠かすことができません。人生で出会う数々のチャレンジを見てもわかるように、安楽な道を進んでいくと、間違った方向に行く場合がほとんどです。実際私たちのたどるべき道が、到達できそうもない、絶望的で不可能な道に見えてくるのがよくあります。

レーマンとレミュエルもそうした経験をしています。ふたりは、レーバンの家に行き、記録を手に入れてくるようにという神の命令を受けたとき、自分たちにはむずかし過ぎるとつぶやきました。(I ニーファイ 3 : 5 参照) このように、彼らには勇気が欠けていたために、せっかくの機会を無にし、その役目は勇敢なニーファイに与えられたのです。ニーファイはこうに答えています。「私は主が命じたもうたことを行って行。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわぬことを承知しているからである。」(I ニーファイ 3 : 7) 勇気という石は欠かすことのできないもののなのです。

次に、私は努力という石を選びたいと思います。これは精神、肉体両面における努力です。

過ちを克服し、弱点を正そうという決意は、努力への第一歩です。「勢力をつくして鎌を入る」(教義と聖約 4 : 4) ことは、伝道に関してのみ言われているものではありません。

次に欠かせないのは謙遜という石です。私たちは、神か

責任とは、しなければならないことをするというだけのことでありません。好むと好まざるとにかかわらず、なすべきことを、必要なときにすることなのです。最大の困難の中にこそ、成長への機会が潜んでいるのです。



ら与えられた啓示の中で、謙遜になれば主なる神が手を取って導き、祈りに答えてくださると約束されているのです。(教義と聖約 112 : 10 参照)

次は、祈りという石です。この石を持たずにゴリアテに立ち向かっていく人がいるでしょうか。自分を超越した力の存在を認めるのは、決して自己を低めることではありません。反対にそれは私たちを高揚させてくれます。

最後に選びたいのは、責任に対する愛という石です。責任は、しなければならないことをするというだけのことでありません。それは、好むと好まざるとにかかわらず、なすべきことを、必要なときにすることなのです。

信仰という石投げ器

信仰という強力な石投げ器によって威力を増す5つのなめらかな石を選んだあとは、自分を強く支えてくれる徳というつえがあればそれで十分です。これだけの備えがあれば、巨人ゴリアテがいつ、どこから、どのように現われてきても、立ち向かっていくことができるのです。

勇気の石つづては、恐れというゴリアテを消し去り、努力という石はためらいや引き延ばしというゴリアテを打ち倒

してしまいます。また高慢、ねたみ、自尊心の欠如というゴリアテも、謙遜、祈り、責任という石の威力の前には無力な存在です。

とりわけ、忘れてならないのは、私たちは自分ひとりの力だけで、生活の中のゴリアテと戦うのではないということです。ダビデがイスラエル人に言った言葉を、私たちもここで思い起こしたいと思います。「この戦いは主の戦いであって、主がわれわれの手に〔ゴリアテ〕を渡される。」

(サムエル上17:47)

しかし、この戦いを避けてはいけません。怠けていては勝利を手にすることはできません。人生における戦いについても同じです。私たちは、将来の生活をこと細かに知ることはできなくても、自分が進んでいく道路の分離帯やカーブの地点は予測できなければなりません。目的地に心を向けなければ、旅をまっとうすることはむずかしくなります。私たちは、はっきりした目的意識を持って物事を決定していかなければならないのです。最大の困難の中にこそ、成長への最高の機会が潜んでいるのです。

「ほふり場に引かるる子羊の如く」

カーセージの獄で、予言者ジョセフ・スミスは、怒り狂った暴徒たちを前にして、死と直面した生活を送っていました。しかし、彼は偉大な信仰を持って心穏やかに、死というゴリアテに立ち向かったのです。「われは、今ほふり場に引かるる子羊の如く行く。されど、わが心は夏の朝の如くに穏かなり。わが良心は神に對しまたすべての人に対しいささかの咎めもなし。」(教義と聖約 135:4)

ゲツセマネにおいてもゴルゴタにおいても、主イエスと死への勝利との間には、人知では計り知れない苦痛が立ちふさがっていました。それでもなお、主は私たちにやさしい言葉をかけてくださいました。「あなたがたのために、場所を用意しに行く……。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14:2-3)

もし、ジョセフが存在せず、獄もなく、暴徒や殉教者もいなかったらどうでしょうか。十字架もキリストの存在もなかったら、今まで述べてきたことに、どんな意義があるのでしょうか。

私たちの生活の中にゴリアテ、あるいはほかの呼び名の巨人がいても、それと戦うときに「避けて逃げ」たり、「ひじょうに恐れ」たりする必要はありません。(サムエル上17:24参照) 私たちは、神から確信と助けを得ることができるのです。ダビデが靈感を受けて記録した詩篇の中には次のように書かれています。「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。……たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わがわいを恐れません。あなたがわたし



と共におられるからです。」(詩篇23:1, 4)

勝利は必ずや私たちのものとなるに違いありません。□

ホームティーチャーへの提案

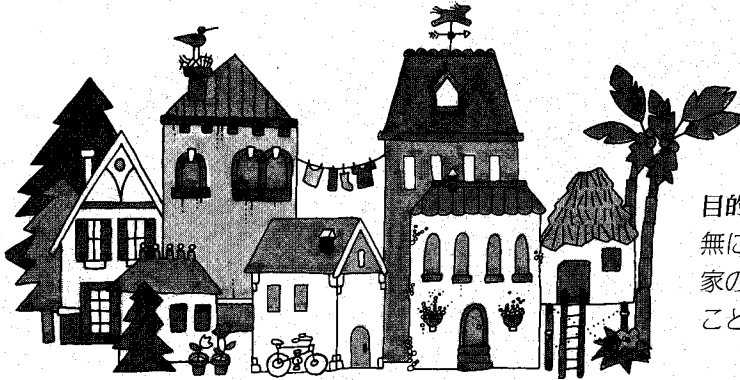
強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うと良いでしょう。

1. ゴリアテを打ち負かしたダビデの物語は、非常に困難な状況を、勇気と信仰で克服したひとりの神の従者の物語である。
2. 多くの人々の生活の中に、幸福への障害となるゴリアテがいる。そのゴリアテとしては、知恵の言葉に関する問題、また舌を制しないこと(ヤコブ3:8参照)、利己心、ねたみ、食欲、恐れ、怠惰、疑惑、不品行、高慢、肉欲などがある。
3. 私たちは、勇気、努力、謙遜、祈り、義務への忠誠などの徳を身につけることにより、自分自身に挑んでくるゴリアテに打ち勝つことができる。
4. 私たちが自分のゴリアテと戦うときに、主から確信と助けを受けることができる。

話し合いを進めるために

1. 個人的なチャレンジや困難を克服することについて自分の意見を述べる。
2. 家族で朗読したり話し合ったりすると良いと思われる聖句や引用文がこの記事の中にあるだろうか。
3. 訪問の前に家長と打ち合わせた方が良い話し合いができるのではないだろうか。定員会のリーダーや監督からのメッセージはないだろうか。

ホームメイキング： すべての女性のための機会



目的：既婚、未婚、また子供の有無にかかわらず、すべての女性が家の中を整える責任を持っていることを強調する。

夫の仕事の都合で、たびたび引っ越しを余儀なくされてきたある婦人が、庭に花の球根を植えていました。それを見ていた隣人が彼女に尋ねました。「来春それが咲くころには、ここにいないかもしれないのに、なぜわざわざ球根を植えたりするんですか？」

「私はいないかもしれませんが、どなたかが住むわけですから。」婦人が答えました。

「住むのは一時的かもしれませんが、住んでいた証拠に私はいつも前よりも少しだけきれいにして家を出るようにしているんです。」

住まいが高価であろうとなかろうと、また未婚、既婚、子供の有無にかかわらず、私たちは皆家の中を整える責任を持っています。私たちには、この地上の家を天の家のようにする責任が与えられています。私たちはまだその天上の家を後にしてきたばかりですが、もう一度そこへ帰りたいと望んでいます。

スペンサー・W・キンボール大管長は、このように書き記しています。「天国とはひとつの場所であるが、ひとつの状態でもある。それは家であり、家族である。天国は相互の一致と思いやりである。……さらには、穏やかで健全な生活であり、個人の犠牲、真のやさしさ、他人に対する心からの思いやりでもある。また神の戒めに従うことである。」（「奇跡に先駆ける信仰」p.265）

エズラ・タフト・ベンソン大管長は、次のように述べています。「主が私たち一人一人に求めておられる偉大なこととは、善意が育まれるように、積極的に楽しく生きること

を教える家庭を創ることです。」（『父たる者に大いなる事求めらるる』「聖徒の道」1981年9月号、pp.56-57）

家とは、モルタルやブロック、木材、土、わらなどだけで作りあげられるものではありません。家とは、天から与えられるものを土台として築きあげられるものです。詩篇の作者が次のように書いているのはそのためです。「主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなし。」（詩篇127：1）

私たちは常に、主の助けを受けてそのような家を建てるようにとのチャレンジを与えられています。教義と聖約第88章に出ている神殿建設に関する次の勧告は、私たちの家庭にもあてはまります。「汝ら組織して必要な物をことごとく調べよ。而して、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」（119節）□

訪問教師への提案

1. あなたの地上の家庭を、天上の家と同じ状態に近づけるために特にどんなことができるでしょうか。
2. 教義と聖約第88章119節の中の勧告を、家を整える者としての責任に当てはめて考えなさい。あなたの家を「栄光の家、秩序の家、神の家」と呼ぶに、よりふさわしい状態にするために何をする必要があるでしょうか。

●6月の家庭訪問メッセージ●「福祉の基本」 目的：福祉活動の基本は愛であることを理解する。

ルース・ハリス・スウェナー

ジュリー・ジェイコブス



オランダにともるひとつの明かり

あるとき、ひとりの若者が、赤々と燃えるランプを手
に、英国の霧深いロンドンの町を歩いていました。
そこへひとりの老人が近づいて来て言いました。「私をホテ
ルまで案内してくれたらお金を払いましょう。」若者はラン
プをかかげながら、その老人を言われた場所に連れて行き
ました。ところがその場所に着いた若者は、ひとりどころ
か3人の人から支払いを受けたのです。道に迷った人がほ
かにもふたりいて、彼らも霧の中をそのランプの明かりを

頼ってついて来たのでした。

「私たちがかけげる明かりが、自分では気づかないうちに
周囲の人々に見られていることがよくあります。」ジュリ
ー・ジェイコブス姉妹は、オランダ語の教会国際機関誌「星」
(日本では「聖徒の道」)の中のお気に入りの話に触れながら
こう語るのです。

「私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として、今は
幸せな日々を送っています。」屈託のない笑顔を見せなが

ら、ジェイコブス姉妹は言います。オランダのライスパイクに住む72歳の彼女は、24年前に改宗して以来、様々な逆境を乗り越えて主に仕えてきました。

ジュリーは、1914年、6人兄弟のひとりとして、インドネシアのスマランに生まれました。彼女が8歳のときに父親が亡くなったため、オランダ人との結婚で家族に勤められていた中国人の母親は、子供たちを育てていくことができなくなってしまいました。のちに家族と一緒に住めるようになるまでの数年間、ジュリーは他家の世話になって過ごしています。

教育学で学位を修めたジュリーは、学校を出て秘書となり、ルドルフ・ジェイコブスと出会うまでその仕事を続けました。そして1938年に彼と結婚したのです。第二次世界大戦が始まると、熟練パイロットであったルドルフはすぐに召集を受け、間もなく日本軍の捕虜となりました。

双子を身ごもっていたジュリーは、ひとり取り残され、幼い息子の世話に明け暮れました。その後の3年間、彼女は育児に追われながらも、食べ物を手に入れるために、編み物や手細工品を売ったり、いろいろな品物を食料品と交換しています。

捕虜収容所から戻ってきたルドルフは、重い病気にかかり、やせ細っていました。そこで、ふたりはもっと良い治療が受けられるオランダに移ることにしたのです。こうして1947年、ジュリーは自分の生地に戻れなくなることも知らずにインドネシアをあとにしたのです。

それから6年後、夫のルドルフ・ジェイコブスを飛行機の墜落事故で失ったジュリーは、再びひとり取り残され、下は5歳から上は14歳までの4人の子供を育てていくことになったのです。彼女はタイプや速記を教える仕事をして働きました。その彼女が、1960年には、長男を交通事故で亡くするというもうひとつの大きな悲しみに見舞われたのです。

息子を失い、そのショックに打ちのめされた彼女は、「自分の体の一部が引き裂かれるような思いがした」と、信仰の危機に直面した経験を語っています。

「どうして自分がこんな試しに遭わなければならないのか、私には理解できませんでした。私はいつもどおり、毎朝、毎晩、ひざまずいて祈ろうと努力してみました。でもどうしても祈りの言葉が口から出てきませんでした。」彼女はこう語っています。

彼女はそれまで一度も教会に行ったことがありませんでしたが、神に対する強い信仰によって、どうにかこの状況を切り抜けることができました。「しばらくしてから、私は、『神は常に愛のお方である』という声を聞きました。それは何度も繰り返されるような感じでした。」

こうして彼女は再び祈るようになりました。「天父への感

謝の気持ちから、私は天父に仕えることのできる教会を探し求めました。」そして、1962年のある雨の降る晩、ふたりの末日聖徒の宣教師がジェイコブス家のドアをたたいたのです。

それから間もなく、ジュリーの息子のひとりが、続いて彼女の妹と母親がバプテスマを受けました。しかし、彼女自身はまだ確信が得られずにいました。娘がバプテスマを受けるという前の日の晩、彼女は宣教師から、福音に対する証を得るために祈ってみようというチャレンジを受けました。

「私は宣教師さんに、何も約束しませんでした。」ジュリーはこう言っています。

「その晩の祈りの中で、私は別に教会のことは祈りませんでした。ところが真夜中に突然目が覚めて、この教会が自分の仕えるにふさわしいまことの教会かどうかを天父に尋ねてみたくなったのです。」

それまであれほど長い時間、あれほど熱心に祈ったことはありませんでした。またあの晩ほど、神の愛と力を強く感じたこともありませんでした。祈り終えたころには、寝室の窓のカーテン越しに朝日が差し込んでいました。早朝のそのひととき、私は外を眺めながら、息子を亡くして以来久しく味わったことのない幸福感と安らぎを味わうことができました。」彼女は、四半世紀も前の早朝のすばらしい経験に思いをはせながら、こう語ってくれました。そしてその日、彼女は娘と一緒にバプテスマを受けたのです。

その後、ジェイコブス姉妹は21年間にわたり、扶助協会で働いてきました。その間の5年間、彼女はオランダハーグステキ部の扶助協会会長を務めています。「それは必ずしも楽な責任ではありませんでした。その5年間に、私は必要な助けや靈感を受けるために、しばしばひざまずいて祈るようになりました。」こう彼女は語っています。

年に3回、ロンドン神殿ではオランダ人の会員たちのために、特別な参入週間を設けています。「大抵私たちは夜出発し、車で数時間行ったところで、英国行きの夜行船に乗り込みます。それからさらに3時間ほど車を走らせて神殿まで行きます。その間はいつも朝6時前に神殿に入って、夕方の6時までいるようにしています。オランダに戻ってきたときはぐったりと疲れていますが、主の宮居で仕事できたと思うと幸せな気持ちになります。」

ジェイコブス姉妹はこう結んでいます。「人生は楽なことばかりではありません。でも私たちは、この世を去るときに、神の腕にやさしく抱かれるというすばらしい報いを手にすることができます。そのことを思えば、人生で出会ういろいろな出来事を勇気をもって受け止めることができます。」□

ボイド・K・パッカ

卓越した教師

ドン・L・サール



ボイド・ケネス・パッカーは、パッカー家の10人の子供の内、5番目の息子として、1924年9月10日、ユタ州ブリガムシティーに生まれました。12歳のとき、彼の家族はパッカー自動車会社のビルのアパートに移り住みました。

勤勉な熟練工であった彼の父親は、何年間もの努力の末、みずから自動車修理事業を起こし、のちに自動車会社を築きあげました。



パッカー長老はわずかな余暇を利用して、1年がかりで手の込んだ鳥の彫り物を作ることもある

1970年から十二使徒定員会会員として働いているボイド・ケネス・パッカー長老

一長老



パッカー長老は、自分の成功は妻ドナの力によるところが多いと語っている

ユタ州プリガムシティーで生まれ育った16歳のボイド・K・パッカー。ほかの同世代の青年たちと同様、のちに彼も第二次世界大戦で軍務に服している。パイロットとしての訓練を受けたのち、太平洋岸地域に任務を命ぜられ、終戦後1年近く日本に駐留した

「子供時代、私は自分の家が貧しいと思ったことがありました。」短い自伝の中で、パッカー長老はこう語っています。「でも、あとになってそれは間違っていたことがわかりました。確かにお金はなかったのですが、生活の中の最も大切な面では、常に裕福だったのです。」

年若いボイド・K・パッカーが心から愛したもののひとつに、自然の美があります。中でも彼は鳥が大好きで、鳥に対する愛情は今なお彼の生活の中にはっきりと見ることができます。パッカー一家の正面玄関の向かいには、くじゃくやキンケイ、はとなどのいる囲いがあります。また家の中には、パッカー長老自身の作の、実物と同じ色に塗られた手のこんだ鳥の彫り物がいくつか置かれています。それらの彫刻品には、生き物に対する彼の感性だけでなく、創造主の芸術的手腕に対する崇敬の念が表われています。

彫り物はどれも、パッカー長老がわずかな余暇を利用して1年がかりで作^{つく}りあげたものばかりです。パッカー長老にはまた、絵画や彫^{てい}塑の趣味もあるのですが、それらの方には最近になるまで手を伸ばすことができませんでした。

なぜなら、彼は父親としての務めを最優先してきたからです。彼は若いときから常に永遠の目標に心を向けて生きているのです。

子供から大人へ

ボイド・K・パッカーの青春時代は、第二次世界大戦の勃^{はっ}発とほぼ時を同じくしてやってきました。高校を卒業後、彼はしばらくの間故郷で陸軍病院の建設の仕事に携わりました。同世代のほかの多くの末日聖徒の青年たちと同様、彼は戦争のために、専任宣教師として伝道に出ることができませんでした。1943年の春、彼は陸軍航空隊に入隊し、翌年、20歳の誕生日を数日後に控えたときに操縦士の資格を取得しました。太平洋岸地域に任務を命ぜられた彼は、終戦後1年近く日本に駐留しました。

軍隊にいた間は聖典を学ぶ時間にも恵まれ、モルモン経を数回読んでいます。最近彼は、モルモン経は「生活に最も力強い影響を与える唯一のもの」と言っています。そのモルモン経から靈感を受けて、心動かされ、彼は日本人に



10人の子供のうちの、最初の3人の子供たちと一緒に撮った写真。1950年初期のボイド・K・パッカー長老と姉妹。左から次男ケネス、長男アラン、三男デビッド

平和の福音を伝えています。当時の軍人から福音を学んだ人の中に、佐藤龍猪兄弟、千代姉妹がいます。ボイド・K・パッカーは、佐藤姉妹にバプテスマを施すという特権に恵まれました。佐藤兄弟にバプテスマを施したのは、現在ソルトレークシティで医師をしているC・エリオット・リチャーズ兄弟です。この佐藤兄弟の翻訳の業により、のちに多くの日本人が母国語で聖典に親しみ、神殿の儀式を受けられるようになったのです。

永遠の伴侶

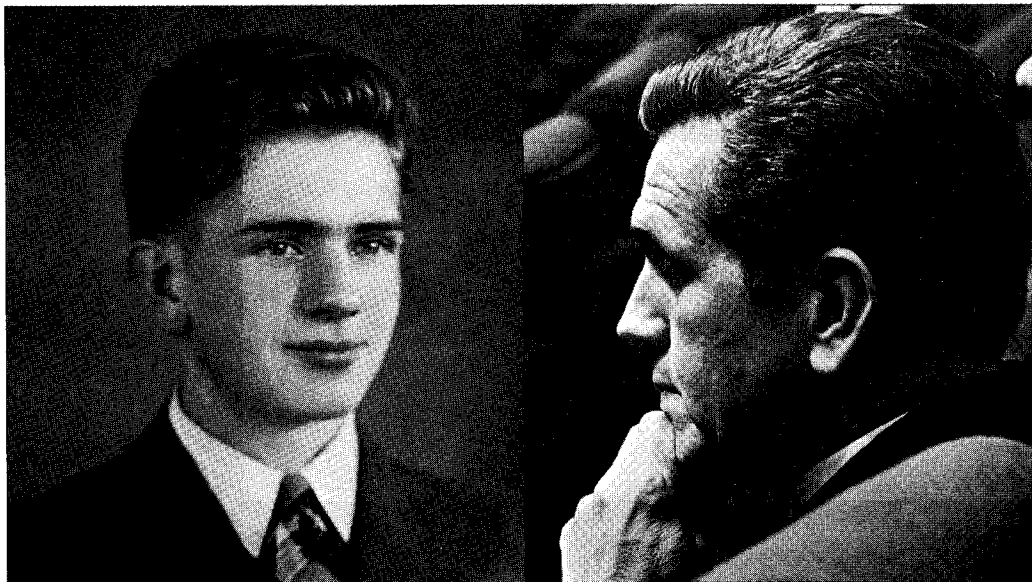
1946年に復員したボイド・K・パッカーは、オグデンの近くの（現州立）ウィーバーカレッジに入学しました。彼はこの大学で、同じブリガムシティ出身のドナ・エディス・ズミスに出会いました。ふたりは、1947年7月27日、

ローガン神殿で結婚しています。

その後、ふたりの間にはアラン、ケネス、デビッド、ローレル、ラッセル、スペンサー、ゲイル、キャサリン、ローレンス、エルドンの10人の子供が生まれています。

パッカー兄弟は教師になることを目指し、その夢を追いかけてきました。彼は1948年にウィーバージュニアカレッジから準学士号を、また1949年にはローガンのユタ州立大学から学士号を受けています。その後、彼は1953年にユタ州立大学から修士号を、1962年にはブリガム・ヤング大学から教育学の博士号を受けています。

その間は、彼にとっては多忙な毎日でした。教師、ステーク書記補助、高等評議員など地元で教会の召しを引き受けるかたわら、1949年にはセミナリーで教師として教え始めています。かつて自分もその建築に携わった、ブリガ



(左)16歳のときのボイド・K・パッカー。ソルトレークシティから北に数キロ離れたところにあるユタ州ブリガムシティで育った。(右)1970年、十二使徒定員会の会員に支持された日のパッカー長老

ムシティの旧陸軍病院は、インディアンの学生のための連邦政府の学校になり、彼はそこで、1949年から1955年の半ばまで、教会教育部の学校に関連して、インディアン問題のコーディネーターを務めました。またこの同じ時期に、彼は4年間ブリガムシティの市会議員を務めています。

さらに大いなる責任

1955年、ボイド・K・パッカーは、教会教育部のセミナーおよびインスティテュートの副理事に任命され、1961年10月、十二使徒補助に召されるまでこの責任にありました。

育ち盛りの子供たちを抱え、責任も大きくなり、なおかつ教育も受け続けてきた結婚後間もないこの時期は、非常に充実したものでした。では、これだけ多くのことを彼はどのようにしてこなすことができたのでしょうか。

「すべては『妻のお陰』の一言に尽きます。彼女は申し分のない人です。」パッカー長老はこう言っています。

長老のこの言葉を受けて、姉妹は笑顔でこう答えます。

「そんな風に言われたら、もっと自分を磨かなくてはね。」

立派な主婦であり、教会にあっては有能な働き手、系図探求者であるドナ・パッカーが、完成された女性であるということははっきりしています。何事についても精力的な彼女は、目下パッカー家の系図に関する本を執筆中です。

「彼女が持っている、人を発奮させる能力は大変なものです。」パッカー長老はこう語っています。

子供たちの必要を満たす

子供のことについて考えを聞くと、パッカー長老も姉妹

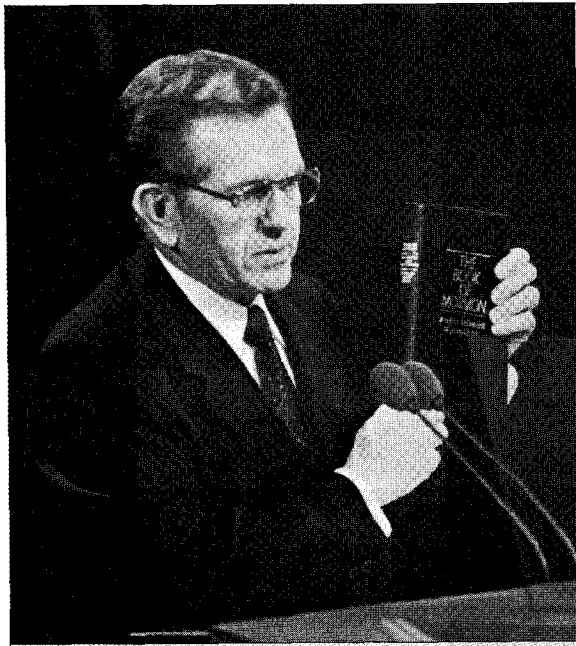
もまるで申し合わせていたかのように、一致した考えを語ってくれます。パッカー長老は、それはふたりが力を合わせて結婚生活を送ってきた賜であると言っています。姉妹はまた、子供たちの必要を満たし、一人一人が持ち前の才能を伸ばしていけるよう、各自に合った教育の機会を提供しようと、前もって夫婦で苦労して計画することが、意見の一致につながるのではないかと語っています。

すでに結婚しているパッカー家のふたりの子供たちを除く全員と、37人の孫の内30人が、車で1時間以内の所に住んでいます。子供たちはよく両親の所を訪ねて来ます。

(パッカー長老と姉妹の勧めで、結婚している子供たちは折あるごとにそれぞれの伴侶の家族とも交わりを深めるように努めています) パッカー家ではパッカー姉妹を中心に計画を立て、毎年夏に身内の人々を集めて懇親会が開かれます。姉妹はパッカー家の先祖の中からひとりかふたりを選び、その人のしていた仕事などをその都度テーマとして取りあげるようにしています。

子供たちが大きくなるまで、パッカー家の家庭生活は、いろいろな点で母親を中心に動いていました。姉妹は、夫が教会の責任で不在のときには子供たちを導き、父親の代弁者としての働きもしなければなりませんでした。しかし子供たちは、常に母親を、そして自分たちを支えてくれてるのは父親であることを承知していました。

「子供たちと家にいられるときは、彼らと一緒にいるようにいつも心がけました。」パッカー長老はこう語っています。事情が許す限り、わずかな時間でも毎日、一人一人の子供と一対一で過ごす時間を持つようにしていたのです。



モルモン経は、パッカー長老の生活に大きな影響を及ぼしている

アラン・パッカーは、父親はあらゆる機会を利用して様々なことを教えてくれたと言っています。パッカー長老の子供たちは、今でも父親に助言を求めに行きます。

最優先にすべきこと

アランはまたこうも言っています。「彼は私たちの族長であり、父親です。父はこの責任を最優先にしています。」

ローレル・パッカー・ディルマンは、父親はどのようなときにもみたまのささやきに対して非常に敏感な人であったと話しています。彼女は自分がブリガム・ヤング大学の学生であったときのことをこう語っています。「私が何か問題を持って苦しんでいるとき、必ず父から電話がかかってくるんです。」父親からのちょっとした励ましの言葉や助言が、彼女には大きな力となりました。

ケネスはこう言っています。「福音に従った生活をしているかどうか、父を心配させることのないような生き方をし、家族を導き、育てていきたいと思っています。」

数年前、パッカー長老は総大会の席で、自分の子供や孫たちに遺産として伝えたいと思うと同時に、「ほかの人の役に立てば」という思いを込めてある話をしました。

「私たちは子供たちに、またその子供たちに知ってもらいたいのです。人生における選びは名声か無名かでも、富か貧困かでもないということを。それは、善か悪かの選びで(す)。……このことをよく理解すると、私たちの幸福は物質的なもので左右されなくなります。たとえ物質的なものに恵まれていなくても、幸福を味わうことができ、真の成功を

かみしめることができるのです。……私たちは今、不確かな将来へと向かって進んではいますが、私たちの思いは不確かなものではありません。子供たちよ、証を述べなさい。シオンを建てなさい。そうすれば、真の成功とまったき幸福を見いだすことでしょう。」(『選び』『聖徒の道』1981年4月号, pp.37-38)

パッカー長老の話の主題は実に広範囲に及んでいます。アランは父親を評して、専門家の力を借りながら、自分で得た知識と霊的洞察力を交えて立派に「宿題」(話の責任のこと)を果たす人と言っています。「父はいつも何時間もかけて話の準備をします。」

一般の教会員にはうかがい知れない努力がなされているのです。

真の教師

「パッカー長老は、まさしく真の教師です。」こう語るのは、十二使徒評議会会員のジェームズ・E・ファウスト長老です。「確かに十二使徒は皆教師なのですが、彼はその十二使徒の中の教師なんです。」ファウスト長老はまた、十二使徒定員会の先輩会員としてのパッカー長老は、教会や会員たちに与える影響を十分に考慮したうえでいろいろな指示を出し、決断を下す人であると話しています。

ファウスト長老はさらに、パッカー長老が指導的立場にあって示す、聖典を貴ぶ気持ちやその聖典の利用の仕方は教会全体の方向づけにも影響を与えているともつけ加えています。

同じく十二使徒評議会会員のラッセル・M・ネルソン長老の語るところによると、定員会で何かの問題について討議するような場合、パッカー長老はモルモン経の中からそれに関連した教えを探し出し、話し合いの中にそれを取り入れることがよくあるということです。

モルモン経は、ボイド・K・パッカーの生活に深く、大きな影響を及ぼしています。「モルモン経なくしては、パッカー長老も今のような予言者とはなれなかったでしょう。彼こそ傑出した聖見者です。」ネルソン長老はこう語っています。

ネルソン長老はまた、パッカー長老が聖典をもとに語る教えには、「深い理解力」が示されているとも言っています。

彼はよく、「みたまの声に耳を傾けることの大切さ」「命

1976年のアイダホ州ティートンダム決壊後、
スペンサー・W・キンボール大管長（右側）と
共に被災地を訪れるパッカー長老（左側）

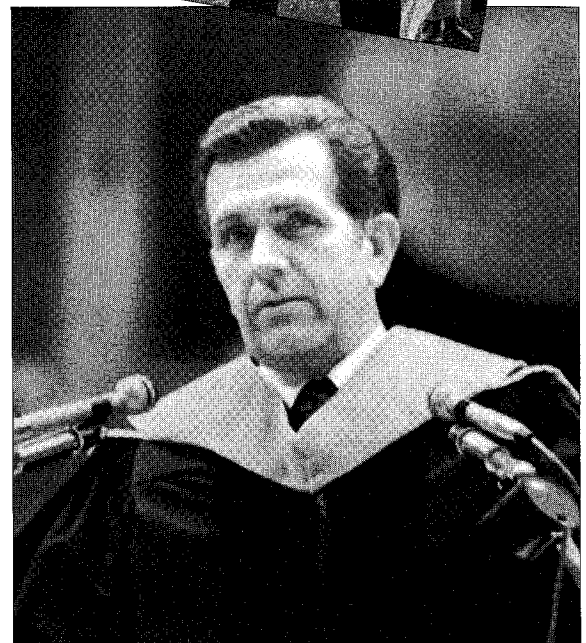


と救いの計画」「伝道」「主の選ばれた指導者を支持する」「幸福への鍵である従順」などといったテーマで話をします。しかし、常に変わらないテーマがひとつあります。それらの底には常にその一貫したテーマが流れています。それは「確かな証」というテーマです。その証をすることが彼の召しであり、特権なのです。

1977年4月の総大会で「仲保者」というテーマで話をしたとき、彼は人類の贖いに対するキリストの重要な役割に触れ、次のように言っています。

「私は主イエス・キリストについて証を述べたいという強い望みを持ってこの大会に臨みました。私は主が何をされたか、また主がどういうお方であるかを、できるだけわかりやすい言葉でお話ししたいと思っています。

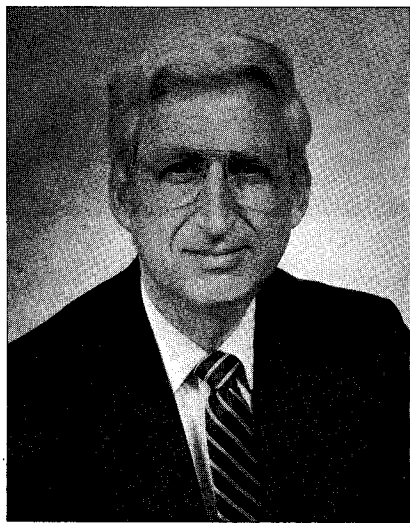
言葉だけではとても言い尽くせないことはわかっていますが、同時に、そのような気持ちは言葉がなくても、みたまによって通じることが多々あることを知っています。私はときどき、自己の不完全さのために苦しむことがあります。しかしそれでも、私は主が生きておられることを知っているのです、最終的には、幸福と喜びに立ち帰ることができます。」（『仲保者』『聖徒の道』1977年10月号、p.488）□



教育者として知られるパッカー長老は、大学の卒業式や様々な式典で、たびたび講演をしている。
1973年、ユタ州立大学で講演中のパッカー長老

質疑応答

本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教義を公式に宣言するものではありません。



私たちは、成長し進歩して天父のようになるためにこの世に送られてきているはずです。では、虐待を受けている子供たちはどうでしょうか。彼らはそうした環境から生じる問題を克服することができるでしょうか。

解答者

カールフレッド・プロデリック

(南カリフォルニア大学社会学教授)

神の子供として、私たちには素晴らしい選択の賜が与えられています。私たちは人の役に立つ方を選ぶことも、人を傷つける方を選ぶこともできます。主がモーセに話しておられるように、不幸にもある世代の人々の不正、罪悪が次代の人々の上に振りかかってくることが多々あります。(出エジプト20：5 参照) 今日、多くの家庭を見れば、それが事実であることはだれの目にも明らかでしょう。問題を抱えた家庭は、その苦痛や罪悪を汚れない子供や孫たちにまで及ぼしていくことが多いようです。ひとつの世代の犠牲者が、次の世代では犠牲を強いる者になってしまうのです。

他方、主は予言者エゼギエルに次のように言っておられます。

「あなたがたがイスラエルの地について、このことわざを用い、『父たちが、酔いぶどうを食べたので子供たちの歯がうく』というのはどんなわけか。

主なる神は言われる、わたしは生きている、あなたがたは再びイスラエルでこのことわざを用いることはない。

見よ、すべての魂はわたしのものである。父の魂も子の魂もわたしのものである。罪を犯した魂は必ず死ぬ。」(エゼキエル18：2-4)

この聖句から、子供は父の罪を繰り返すべきではなく、

どの世代の人でも自分の選択に対しては自分で責任を取らなければならないことがわかります。

私はこれまで教会の様々な召しを果たし、また家族を対象としたセラピストとしても働いてきました。それらの体験を通して、神がそのような破滅的な家系にみずから手を差し伸べ、破滅の鎖を断ち切るためにすぐれた霊を送られることがあるということを強く確信しています。そのような子供たちは、自分自身にはまったく罪がないのに、暴力、怠惰、搾取などにより、苦しみを味わうかもしれません。しかしそれでも、神の恵みによって自分たちの中にある「毒」を一掃するための力を見だし、子孫に不幸の種を伝えることのないように努力する人々もいるのです。たとえそれまで破滅的な苦しみを味わった世代が続いたとしても、それ以後は清く汚れない家系が続いていきます。そして彼らの子孫はみずからを幸いな者と呼ぶようになるのです。

こうした人々は、みずからは罪がないにもかかわらず、ほかの人が味わうことのない苦痛を身に受けることがあるかもしれません。しかしたとえそうであっても、自分の家系に救いをもたらす努力を続けることで、多少なりとも「シオンの山の救い手」となれるのです。

私はこれまでも、そうした信じられないような苦痛や屈

辱を背負った大勢の人々を見てきました。ある若い女性は、繰り返し父親から性的虐待を受けていました。彼女は勇気をもってついにそのことを母親に話したのですが、それは母親を怒らせることとなり、母親から打たれ、捨てられたのです。

この経験から、彼女は世をはかなみ、さらに自信喪失に陥ってしまいました。しかし数々の大きな障害があったにもかかわらず、彼女は神と和合し、信頼できる夫を見つけ、共にすばらしい家庭を築いています。それだけでなく、彼女は全精力を傾けて、同様の背景を持つ女性たちが、その家系から毒を一掃していく手助けをしています。

もうひとつ、母親を亡くした12歳になるある男の子の例ですが、彼の父親は、息子を部屋に閉じ込めてはほかの女性と酒を飲みあかしていました。そして息子を部屋から出したときはなぐりつけて、ときには骨を折ったり、気絶させたり、脳しんとうを起こさせたりすることもしばしばでした。

例にたがわず、この少年は精神的に混乱したまま自己嫌悪と人間に対する敵意を持った青年に育っていきました。しかしここでも主は見捨てられることがなく、彼が成長できるように友人やいろいろな機会を与えてくださったのです。数々の霊的な癒しの奇跡を通して、現在この若者はすばらしい女性との神殿結婚に向け、準備をしています。ふたりはそこで共に、義と愛とやさしさの中で子供を育てていく責任を受けるのです。

昔、主は大洪水をもって、ふさわしくない血統を滅ぼされました。しかし今の時代に、主はそのような民を清めるために、大勢のえりすぐった人々を送ってくださっていると私は確信しています。

主はエレミヤの時代に、のちにエゼキエルに語りかけられたときと同じ言葉を用い、次のように言うておられます。

「その時、彼らはもはや、『父がすっぱいぶどうを食べたので、子どもの歯がうく』とは言わない。

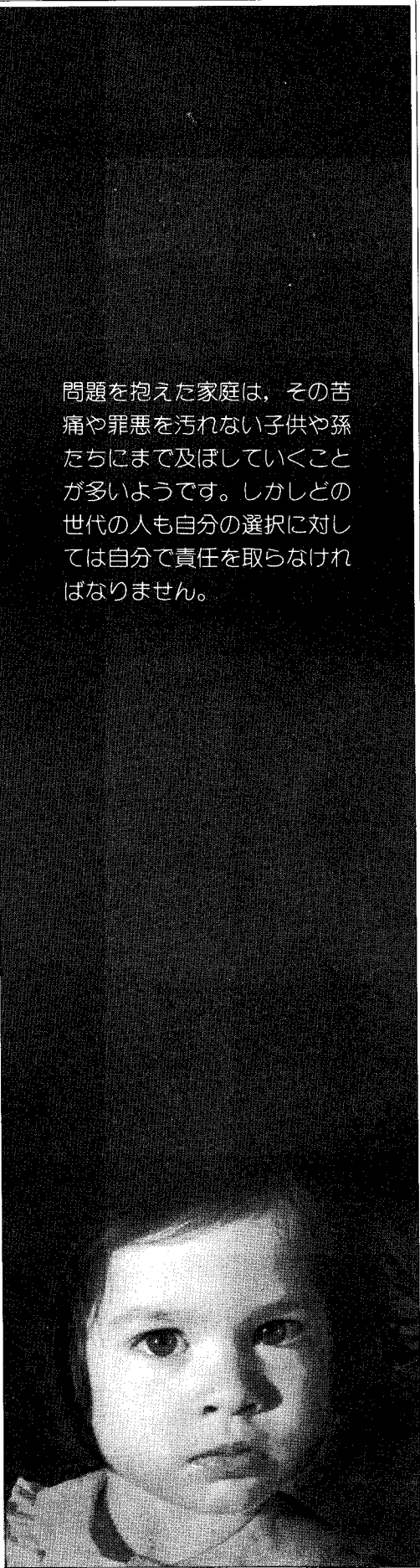
人はめいめい自分の罪によって死ぬ。すっぱいぶどうを食べる人はみな、その歯がうく。」(エレミヤ31：29-30)

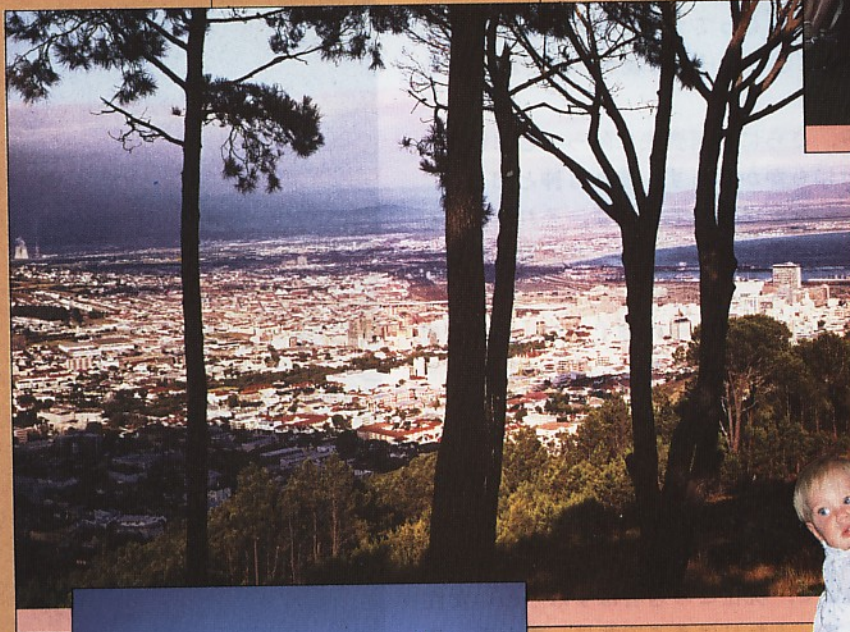
主はさらに続けて、この新しい誓約の世代について述べておられます。「わたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」(エレミヤ31：33)

大抵の人は、そのようにして苦しみを受けながらもすぐれた資質を秘めている人を、幾人かは知っているはずで、成長してからのちの段階であれば、そのような人々に気づくのはそうむずかしいことはありません。しかし、まだ早い段階では、彼らはひどい逆境の中で耐え難い苦しみを受けている状況にあります。彼らの姿を見て、その憎悪や苦悩を超えたところに純粋な霊が内在しているのを識別するには、鋭く研ぎ澄まされた霊的な感受性が必要です。そのような人々と親しくし、彼らが高い目標に到達できるよう、できる限りの援助を与えていくことは、私たちの義務であり特権です。

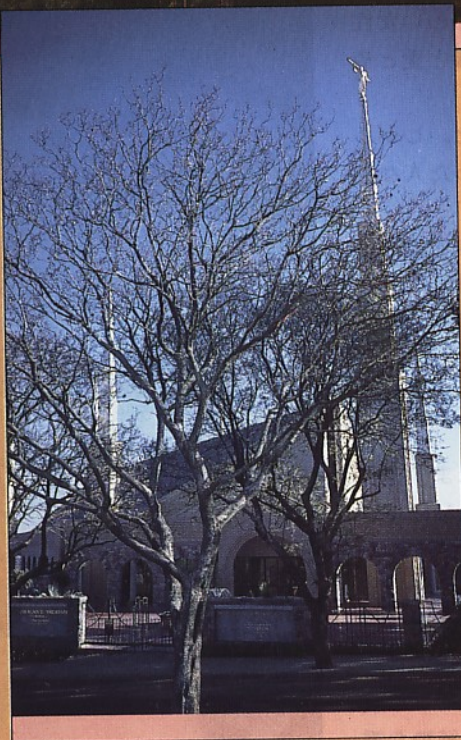
私たちの中にも、これまで述べてきたような苦しみを経験した人がいるかもしれません。それでも私たちは人々に光を伝える責任を与えられています。とげとげしい思いを捨て、救い主の足跡に従って、神が与えられた務めを忠実に果たしていこうではありませんか。□

問題を抱えた家庭は、その苦痛や罪惡を汚れない子供や孫たちにまで及ぼしていくことが多いようです。しかしどの世代の人も自分の選択に対しては自分で責任を取らなければなりません。





ステーキ部大会に出席する南
アフリカサントンスステーキ部
の会員たち



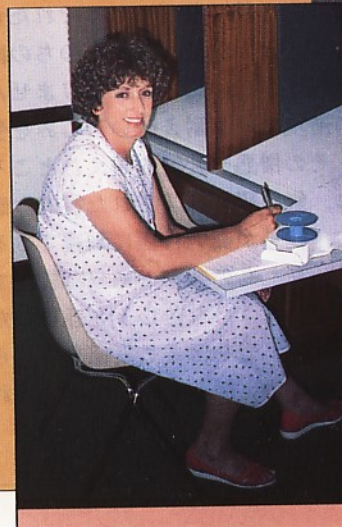
1985年8月に献堂された、南
アフリカヨハネスバーグ神殿

ケープタウン

ケープタウン第1ワー
ド部に所属するマルコ
ム・バセット、ポーリン・
バセット夫妻と子供た
ち



1976年に設立されたヨハネスバーグ系図書館分館
のマイクロフィルムリーダーを調べる図書委員シル
ビア・J・ミルン。ミルン姉妹は、南アフリカで初め
ての「人名抄出プログラム」に携わった。現在は南
アフリカヨハネスバーグ神殿の書記をしている。



南アフリカの聖徒たち



1984年、シホ・モーゼズ・コモは英国のロンドンで、専任宣教師として伝道を始めました。もちろん、伝道に従事する末日聖徒の若者として特に変わったところはないのですが、コモ長老は、南アフリカのズールー族から召された最初の宣教師だったのです。

伝道を終えたコモ長老は、現在南アフリカ政府に指定された、約50万人のズールー族の故郷クワズールに戻って来ています。そのクワズールでは、末日聖徒の数が最近とみに増えているのです。南アフリカダーバンステーク部のチャピー・ウィンスタンリーステーク部長によれば、クワズールの大きな町クワマシュのある支部には、毎週「何百人」もの人が集まっているということです。彼はまた、そこで働く宣教師たちはズールー族の多くの人々が神への知識を求めている姿を目にしているとも語っています。

ズールー族の言葉を話すダーバンステーク部ダーバン第1ワード部のワード部伝道主任マーコム・ボウズ・テイラーは、ズールー族への伝道の業を思い起こしながらこう語っています。「レッスンはほとんどが、ろうそく1本の明かりを頼りに粗末な家で行なわれました。素朴で力強い信仰の持ち主である素直な彼らは、福音をすぐに受け入れるんです。」

マージョリー・E・ウッズ

プレトリアの教会員たち。左からウナ・ベラ
ブスロー、バラバシー・
ヒラ、ボビー・ヒラ



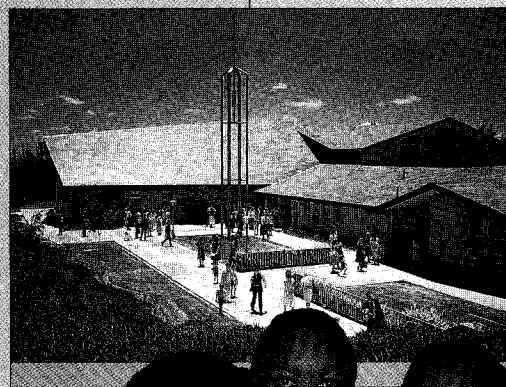
ズルー族の末日聖徒数の増加は、南アフリカにおける最近の教会の成長ぶりをよく物語っています。現在、12,000人の会員がおり、4つのステーキ部とふたつの伝道部が組織されています。地理的に見れば、会員たちは（南アフリカのダーバンからナミビアのウインドホークまで）東西2,400キロ、またジンバブエのハラロから南アフリカのケープタウンまで南北2,600キロにわたる地域に散在していることになります。

「信仰の守り手」

サントンステキ部のステーキ部長ジョアン・P・ブラマーは、聖徒たちが南アフリカの何百万という人々の中に分散しているという事実が、まだ少数派の彼らに福音の真価を十分に意識させ、自分こそが「信仰の守り手」という気持ちにさせているのではないかと見ています。彼はまたこうも語っています。「南アフリカにおける最近の教会について私自身が重要だと感じていることをあげるとしたら、会員たちの生活の変化ですね。会員のほとんどが改宗者なんです。」

こうした新しい改宗者のほかに、南アフリカには末日聖徒となって二代目、三代目という家族も少なくありません。南アフリカケープタウンステーキ部第一副ステーキ部長のフランク・フォーリーも、会員となって50年以上もたつそうした家族の一員です。すでに亡くなっている母親ヨハンナの改宗談を、彼はこう語っています。「母は福音に関していくつか疑問を持っていましたが、牧師から答えを得ることができませんでした。そこで母は牧師にこう言っていたのです。『この疑問に答えてくれる教会が見つかったら、私はそこに移ることになるでしょう』と。」

1934年に末日聖徒の宣教師が我が家のドアをたたきました。そして招き入れた母の疑問はすべて答えられたのです。母と私たちは、今は取り壊されてしまっているモーブレイの古いホールでバプテスマを受けました。母は、壁にかけてあるソルトレーク神殿の絵を見あげては、いつの日かそこに行くかと誓いを立てていました。しかし大恐慌の最中、その夢もかなわないかに見えたのですが、後にそれは実現しました。」ヨハンナは、長年初等協会の会長を務めてきました。フォーリー副ステーキ部長はこう言っています。「私



(上から) 誕生日を祝う、バーバラ・レンチ、ビル・レンチ夫妻とその家族。南アフリカ南東岸近くの、ドラケンスバーグ山脈の中の田園風景(写真提供: 南アフリカ観光協会)。南アフリカサントンスターキ部センター。ブルームフォンテインの教会員、エリアス・ビス家族

のところには、クモラサザンメッセンジャー(初等協会会長在職中の彼女の80歳の誕生日パーティーを報じた、初期の末日聖徒の刊行物)のコピーがあります。」

人種のるつぼ

南アフリカサントンスターキ部扶助協会の第一副会長を務めるエドウィーナ・スワツバーグもそうした忠実な家族の一員です。彼女自身は、末日聖徒としては三代目にあたります。彼女はある男性に神殿について説明をしたことがあります。アイザックという名のその男性は正当派ユダヤ教の中で育てられた人でしたが、神殿についての彼女の説明がひとつの助けとなって、やがてこの教会に改宗し、後にふたりは結婚することになりました。聖典の中では、主が常に神殿で人々に話されたことが書かれているのに、なぜこの時代には地上に神殿がないのか、彼はずっと疑問に思っていました。また、旧約聖書の中のキリストに関する予言(特に詩篇第22篇)についても彼は真実であるという確信を得、すべてが納得のいくものとなったのです。スワツバーグ夫妻は後に、ソルトレーク神殿で結び固めを受けています。ふたりは現在プレトリアに住んでおり、スワツバーグ兄弟はそこで、教会の法律顧問と教会広報部長をしています。

スワツバーグ夫妻は、南アフリカに見られる数多い人種と伝統のうち、わずかふたつを反映しているに過ぎません。南アフリカの人口は、全体の20パーセント弱を白人が、そしていろいろな種族からなる黒人が70パーセントを占めています。このほかにも、種々雑多な人々からなるいわゆる「カラード」や、おもに1世紀少し前にナタールの砂糖工場の労働者としてインドから連れて来られた人々の子孫である「アジア人」も多くいます。末日聖徒の宣教師は、これらの人々の中で伝道に大きな成果をあげています。ほかにもユダヤ人、ギリシャ人、ポルトガル人などがおり、分裂派のケープ・マライ人は、イスラム教徒を名乗っています。

3世紀半近くもの歴史の中で築かれてきた従来の社会様式や傾向は徐々に変わりつつあります。サントンスターキ部のジョアン・ブラマースターキ部長はこう語っています。「現在は様々な文化の再編成期です。実に早いペースで大き

な変化が起こっています。その早さについていくのは大変なことで、まさに『カルチャー・ショック』ですよ。」

平和と善意

ブラマースターキ部長は、こうした問題があるにもかかわらず、「教会は白人黒人を問わず、会員たちにひたすら平和と善意を説き続けています」と付け加えています。またスワツバーグ兄弟もこう言っています。「伝統の違いによる壁は徐々になくなりつつあります。」

「すべてのふさわしい男性に神権が授けられるようになったことで、黒人に対する伝道に大きな展望が開けました。」こう語るのは、南アフリカヨハネスバーグ地区の地区代表であり、ヨハネスバーグの神殿記録部長の職にあるルイス・P・ヘファー兄弟です。黒人たちはほとんどが彼らだけで集会を持っています。ソウェト支部は、すべて黒人によって運営されています。ほかにも、黒人の指導者が育つまで一時的に白人に管理されている黒人たちの集会所が3つほどあります。またダーバンには黒人とインド人のための支部が、そしてシスケイには小規模のユニットがいくつかあります。

「私たちはソウェト支部の開拓者でした。」当時を思い起こしながらこう語るのは、ヨハネスバーグのジェームス・バン・ザイル兄弟です。彼の妻モーリーンは、夫と共に伝道の業に従事してきました。「24年間の会員生活の中で、この伝道は最も報いある経験となりました。最初にバプテスマを受けることになったのがシホ・コモでした。彼はそれ以前からモルモン経で結ばれた仲間を作り、バプテスマや神権を受けられる日を心待ちにしながら、仲間にモルモン経に書かれている原則を説いていたのです。」

7カ国語に堪能なソウェト支部扶助協会会長ジュリア・マビンベラは、レッスンの通訳のためにいつも宣教師に付き添っていきます。彼女にとっては人々のために働くことが生きがいなのです。たとえば、日陰のない校庭や公共の場を見つければ木を植えに行くというふうには、何かなすべきことがあるのに気がつく、必ずそれを自分からするのです。

特別な保母の訓練を受け、以前は学校の校長を務めたこともある彼女は、現在レストラン、パン屋、肉屋、薬用植

物店を1軒ずつ所有しています。彼女は謙遜にこう証しています。「私は、主が、福音に対して私を備えさせてくださったと確信しています。福音から得られる喜びは言い表わすことができません。福音とこの教会が真実であり、幸せになる方法を教えてくれることを心から証します。」夫に先立たれていた彼女は、ヨハネスバーグ神殿の献堂後、夫婦の結び固めを受けています。

マビンベラ姉妹は、平和を願う女性の会の多民族理事会の役員をしています。彼女はほかのいろいろな女性の組織の創始者でもあり、その一員でもあります。「人の家のドアをたたくのが怖いときもありますが、私は、主が特にその家に私を導いてくださっているのだから、必ず守ってくださると自分に言い聞かせるんです。」

証を強めさせてくれるもの

南アフリカの聖徒たちにとって、福音の原則は家庭生活の中心になっています。会員となって35年になるサントン第1ワード部のバーバラ・レンチ、ウィルフレッド(ビル)・レンチ夫妻は、次のように話しています。「自分の子供たちや孫たちが教会で活発にやっているのを見ていて、天父も喜んでおられると感ずることができるようになりました。彼らの証は私たちを強めてくれます。」息子のイアンとマイケルは、それぞれ南アフリカサントンステーク部の第一副ステーク部長、第二副ステーク部長を務めています。

南アフリカでは、教会の補助組織プログラムがすべて実施され、出席率も高くなっています。教会教育部の地域指導者であるドナルド・E・ハーパーはこう言っています。「1974年に始まったセミナリーとインスティテュートには、青少年の70パーセントが参加しています。彼らは朝5時に起き、6時から7時まで1時間レッスンを受け、学校が8時に始まるので、そのあとまっすぐ学校に行きます。彼らは週5日間これを実行しています。実に熱心ですよ。」セミナリー、インスティテュートには、夜の部のクラスもあります。

最初の宣教師たち

南アフリカにおけるこの成長ぶりは、南アフリカ最初の伝道部長として召されたジェシー・ヘイブンによって、130

年以上も前に予測されていました。ウィリアム・ホームズ・ウォーカー、レオナード・I・スミスのふたりの同僚と共に、彼は喜望峰に教会を組織し、そこを伝道の地として奉獻しました。1853年5月23日、ケープタウンを見下ろすライオンズヘッドという丘の斜面に立って、彼はこう言ったのです。「心の清い多くの人々が、永遠の福音を受け入れるようになるでしょう。」

過酷な状況や人々の反対に出会って、初期の数年間はあるような成長が見られませんでした。彼のその言葉は確かに真実でした。

改宗者はありませんでしたが、彼らの多くがアメリカへ移住して行ったために、南アフリカの末日聖徒の人口は、ほぼ1世紀にわたり低迷を続けていました。しかし、忠実な人々は、辺境地戦争や南阿戦争(1856-61, 1865-1904)、また第一次、第二次両世界大戦の最中に、宣教師たちが退去した時期でさえ、福音の教えを守り続けてきたのです。

「距離的な問題で、私たちは教会の本部から孤立してしまったような気持ちになることがよくあります。ですから、私たちには教会の指導者の訪問がとても待ち遠しいんです。」こう語るのは、南アフリカダーバンステーク部パイウンワード部扶助協会教養教師のデビー・ビアル姉妹です。

確かに、ダーバンはこの地上で、教会が組織されているほかのどの地点よりもソルトレークシティから遠く離れているのです。

最初の伝道部長として、ヘイブン伝道部長が南アフリカに足を踏み入れてから、1954年に教会幹部であったデビッド・O・マッケイ大管長がそこを訪れるまで、まる1世紀の時の流れがありました。その後1972年には十二使徒定員会の会員であったエズラ・タフト・ベンソン長老が、また1973年には当時十二使徒定員会会長であったスベンサー・W・キンボール大管長が南アフリカを訪れています。キンボール大管長はヨハネスバーグに滞在中、すでに南アフリカにおける教会の中心になっていたその地を、再奉獻しています。

教会を強める

こうした教会幹部の訪問によって、会員たちは勇気づけられ、教会も急速な発展を見せました。その結果、1978年



国際国家

地勢的に見ると、南アフリカはある種の雄大さを具えている。国の南端ではインド洋と大西洋がぶつかり合い、内陸部のカルー大高原からは、どの方向に目を向けてもほとんどさえぎられることなく地平線を見渡すことができる。北西部のカラハリゲムズボック国立公園や北東部のクルーガー国立公園に行くと、アフリカ特有の野生動物を見ることができる。国家発祥の地であり立法上の首都でもある歴史的な町ケープタウンと、活気あふれる「金の町」ヨハネスバーグは、世界の大都市と肩を並べてもひけをとらない。

長い黒人の歴史を持つ国際国家南アフリカは、早くも15世紀にはヨーロッパ人の影響を受けている。1488年、ポルトガル人の航海者バーソロミュー・ディアスは、現在のケープタウンの東400キロほどのモセルベイで陸地を確認している。それから200年後、その岬にオランダの東インド会社が、商船のための停泊地を作っている。その後おもにフランス、ドイツ、イギリスからの移住者が押し寄せ、その地の発展に大いに寄与している。

オランダの東インド会社の働きにあわせ、多くのオランダ人が南アフリカに送り込まれている。彼らの子孫はドイツ人やフランス人の移住者と共に、今日のアフリカーナ（アフリカ生まれの白人）の大半を構成している。彼らは独自の言語、アフリカーンス語を話す。南アフリカの白人人口の約60パーセントが彼らで、残りの40パーセントはおもに英語を話す。彼らはイギリス統治下またそれ以前の時代到大英帝国から移住して来た人々の子孫である。そして、今もイギリスからの移住は続いている。

には、ヨハネスバーグで初めての南アフリカ地域総大会が開かれています。キンボール大管長も、ほかの数人の教会指導者と共にこの大会に出席しています。南アフリカの地に、同時にふたり以上の教会幹部が訪問したのは初めてのことでした。当時は、国中の教会員の家族が、この特別な集会に出席するために、何カ月も前から準備を進めたものです。

ヘファー兄弟はこう言っています。「教会の成長に伴い、自国の宣教師が大勢召されるようになりました。また帰還宣教師たちはステーク部長会や扶助協会会長会で、あるいは監督会などで責任を受けて活躍中です。このように、教会は全体的にその力を増し加えています。」

南アフリカの聖徒たちにとり画期的な出来事となったのは、1985年の8月に、南アフリカヨハネスバーグ神殿が献堂されたことです。多くの聖徒たちにとって、神殿は生活の一部となりました。彼らは定期的に神殿に参入し、誓約に忠実に生活しています。また神殿で働きながら、神殿の重要性についてより深く学んでいる人々もいます。

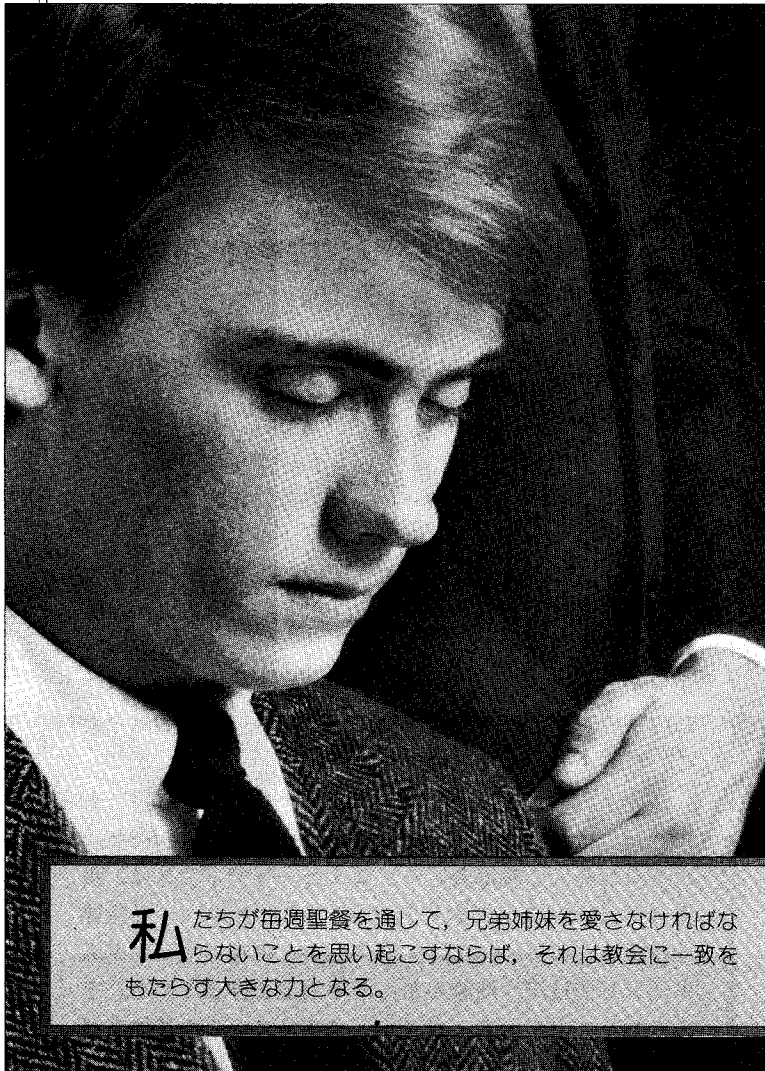
現在神殿の書記をしている会員歴29年のシルビア・J・ミルン姉妹は、一緒に働いている多くの人々の思いを代表して、こう語っています。「主の宮居で働けることは素晴らしい特権です。死者のための業に携わっている人々には、同じ仲間の役に立ちたいというすばらしい精神がみなぎっています。」

主の愛の確かな証である新しい神殿を前に、南アフリカの聖徒たちは、1855年12月、南アフリカを去るにあたり自分の伝道の業を評価して語ったジェシー・ヘイブンの言葉を思い起こしながら、心穏やかに将来への展望を広げることができるのではないのでしょうか。彼はこう語っています。「主は私たちを祝福してくださったと思います。この地に、良き業の基が置かれ、種がまかれたのです。」その種は今や立派に根を張り、大きく生長し、すばらしい実を結びつつあります。□

* マージョリー・E・ウッズ：フリーランスの作家。ヨハネスバーグの系図図書館分館副主任。南アフリカサントンステーク部サントン第1ワード部会員

聖餐の祈りについて 思うこと

ジョン・S・タナー



私 たちが毎週聖餐を通して、兄弟姉妹を愛さなければならぬことを思い起こすならば、それは教会に一致をもたらす大きな力となる。



教 会員に最もよく知られている聖句をあげるとすれば、^{せいさん}聖餐の祈りが載っているモロナイ書第4章3節、第5章2節、教義と聖約第20章77、79節ではないでしょうか。1週間の間、私たちはほかにもいろいろな聖句に接しますが、これらの聖句は毎週日曜日、欠かさず耳にします。教会統合化プログラムが実施されるようになるまで、私たちは日曜日に2度、すなわち日曜学校の開会行事と聖餐式の両方でこれらの聖句を耳にしてきました。私の場合、すでに3,300

回以上も聞いてきたことになります。

聖餐の祈りは、主の啓示によって、一つ一つの言葉遣いが定められた数少ない祈りです。主がご自分の民に、これらの神聖な言葉に定期的に深く思いを寄せるよう望んでおられることがはっきりとわかります。しかし、私たちは言葉の裏にある真の意味にあまり心を向けずに、耳を傾けていることが多いようです。

聖餐の祈りの言葉の分析

私は、一行ごとに意味を考え、重要な語句に注意を向け、一句一句祈りの言葉を味わうことによって、霊的な恵みをたくさん受けてきました。これは私だけでなく、聖餐式で礼拝する皆さんにもきっと役立つでしょう。

1. 「永遠の父なる神よ」

聖餐の祈りはどちらもこの言葉で始まっています。しかも、どちらの祈りでも神という呼び名が2度も繰り返され、そのたびに神が永遠の御父であることを私たちに思い起こさせてくれています。私は確かに救い主が払われた大いなる犠牲に思いをはせるのですが、父なる神ご自身も、ひどく心を痛め、贖いの犠牲の苦しみを共にされたことをしばしば見過ごしにしていました。御父は御子とその苦しみを味わうことがないようにすることもできたはずでした。メルビン・J・バラード長老は、御子の苦しみをごらんになっていた御父の苦悩について次のように述べています。

「神は園において、主が大いなる苦痛と悲しみの内に叫ばれるのをお聞きになった。そのとき、主はあらゆる毛の穴から血の汗をしたたらせたとされている。そして主はこう叫ばれた。『父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。』(ルカ22:42)

私は尋ねたい。子供がこの世で希望を失い、何の助けも得られずに泣き叫んでいるのを見て、何もしないでいられる親がいるだろうか。……

このとき天父が幕のかなたでこの死との格闘の様子をもうこれ以上耐えられないというところまでじっと見守っておられたことが、私にはわかる。そして死に行く息子に別れを告げ、最後の苦悶の様子を見ないですむようにと部屋から連れ出されたあの母親のように、天父もその偉大な心を御子への愛で張り裂けんばかりにして頭を垂れ、宇宙の一角に姿を隠された。その瞬間にも御父は御子を救えたというのに。私は私たちをお見捨てにならなかったことを天父に感謝し、天父を賛美したい。天父が心に抱いておられたのは御子への愛だけではない。私たちをも天父は愛しておられたのである。」(「聖徒の道」1976年6月号, pp.253-54)

これらのことを考えると、聖餐の祈りが私たちに、神は父であり、その父の犠牲も贖いに欠かせないものであったことを思い起こさせてくれるのは、当然のことかもしれません。

2. 「われら……願いたてまつる」

われら願いたてまつるとあるように、聖餐は本来ひとりだけで受けるものでなく、教会員が共に分かち合うもので

す。私たちは、同じバプテスマの誓約を交わした兄弟姉妹と共に、聖餐にあずかります。私たちはみな悔い改めをし、戒めに添った生活をするという決意をする必要があるのです。聖餐にあずかるというのは、正式なかたちを通して、聖徒としての交わりを深めていくことなのです。

デビッド・O・マッケイ大管長は、この絆について次のように述べています。

「イエス・キリストの教会が設立された初期のころ、教会員たちはたびたび夜明けに集合し、兄弟愛の絆と一致の精神をもってこの聖餐にあずかったと言われている。これまでも常に、聖餐の場には兄弟愛の精神が伴ってきた。

私たちはキリストによって結ばれた兄弟として、同等の立場で集い、相手に対し、またお互いに対し信頼を表わすのである。」(「インプルーブメント・エラ」1953年1月号, pp.13-14)

聖餐からより豊かな喜びを得るには、聖徒同士が互いに和解しなければならぬと教えている聖句はほかにもたくさんあります。「何人^{なんびと}にてもあれ、もし罪咎^{とが}あらば和ぎを得るまでこれに与^{あずか}らしむることなかれ。」(教義と聖約46:4。Iコリント10:21; IIIニーフアイ18:28-29; 教義と聖約20:68-69も参照のこと) 私たちは皆同じように、主のみたまと赦しを受ける必要があります。したがって、「われら」はそれらを主に「願いたてまつる」のです。

3. 「御子イエス・キリストの御名によりて」

父祖アダムが最初に犠牲を捧げて以来、私たちはすべてのことを御子のみ名によってとり行なうよう指示されてきました。天使はこうアダムに教えています。「この故に、汝^{なんじ}の^{ため}にすべてを御子の御名によりて為せ。また汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし。」(モーセ5:8)

私たちはなぜ御子のみ名によって祈るのでしょうか。それは、御子が御父と私たちの間をとりなす仲保者だからです。私は聖餐を受けるときに、よく私たちのために御父に嘆願して下さったキリストの言葉を思い起こします。

「父よ、汝の悦^{よろこ}びたまいし罪を犯さざりし者の蒙る苦しみと死^しを見^みせなわせたまえ。汝の子の流せる血、すなわち汝の崇められんがために与えたまいし、汝の子の血を見せなわせたまえ。

この故に父よ。わが名を信ずるわが兄弟らを赦したまえ。かくて彼らをしてわれに來りて永遠の生命を得しめたまえ。」(教義と聖約45:4-5)

これらの言葉は、「御子の御名により」捧げられる聖餐の

信仰の証をたてること、すなわち厳粛な態度で神に語りかけるのは非常に重大なことです。

祈りを、より深く理解させてくれます。

4. 「このパン(水)をいただくすべての人々」のために「このパン(水)を祝いきよめたまえ」

パンは、私たちに御子の体を思い起こさせてくれます。パンをいただくとき、私は主の味わわれた肉体の苦痛、すなわち打ちたたれた背の痛みやひたいのとげの刺し傷などを思い起こします。また救い主はゴルゴダまでのほこりっぽい道を十字架を引きずりながら進まれましたが、その十字架の重みも思い浮かんできます。さらに、手首を刺し貫き、所定の場所に十字架が打ち立てられたときに肉までも引き裂いた釘、苦痛にもがく犠牲者を容赦なく痛めつけるあの残酷な磔刑が頭に浮かんできます。そして最後に、これらの苦痛を主がすべてみずからの意志で受けられたことと、贖い主も、御父も、いつでもそれをやめさせる力を持っておられたのだということが思い出されます。

水は、私たちに御子の流された血を思い起こさせてくれます。聖餐のカップに入った水を飲むとき、私たちの罪を担ってくださった主の精神的な苦痛が思い出されます。さらにあのあらゆる毛穴から血がしたたったゲツセマネのことが思い出されます。主の苦悩と憐れみはそれほどまでに深いものだったのです。(モーサヤ3:7; ルカ22:44; 教義と聖約19:16-19参照)

パンは、私たちの心のために、すなわち霊を養うために祝いきよめられるのです。私たちはみな、毎週毎週霊的な力を弱めるような過ちを犯してしまいます。しかし、自分自身を再び神にゆだねようと心から願い、義に飢え乾いた状態で聖餐を受けるなら、私たちは再び霊的な力で満たされるのです。メルビン・J・バラード長老は次のように証しています。

「私は聖餐を執行しているときにみたまがくんだり、頭のとっぺんから足の先まで温まるのをこの体で感じることもある。あなた方は霊の傷が癒され、重荷が軽くされることを感じる。」(「聖徒の道」1983年7月号, p.23)

確かに、パンと水は、ふさわしい状態でそれにあずかる人々の霊を養ってくれます。パンと水は、そのために祝いきよめられるのです。

5. 「御子のからだ(血)の記念にこれをいただくよう」

私たちは聖餐を「記念」としていただきます。このことから、聖餐は贖いの再現ではなく、あくまでも「記念」であることがわかります。多くの人々が信じているように、贖いの象徴が不思議な方法で血と肉に変わるものではありません。



せん。この簡潔な教義をめぐる、何千人もの人々が迫害され、命を奪われてきました。啓示を通して与えられた聖餐の祈りにより、この教義が明確に打ち出されていることに深く感謝したいと思います。これらの象徴は、主の肉と血を表わしています。ですから私たちはそれらを「記念」するのです。

6. 「喜びて……永遠の父なる神の御前に証明し……」

しかし私たちは、過去のことをただ記念するためだけに集うではありません。現在のこと、将来のことに対して決意をするために、すなわち信仰の証をたてるために集うのです。では、信仰の証をたてるとはどういうことでしょうか。ロバート・ボルトは「いかなる時も」という劇の中で、登場人物トーマス・モアに「宣誓」とは、「神に語りかける言葉」と定義させています。(ニューヨーク: ヴィンテージ・ブックス, 1962年, p.81)

信仰の証をたてること、すなわち厳粛な態度で神に語りかけるのは非常に重大なことです。これをいい加減な気持



ちですと、私たちは自分自身の心の中にする決意も含めて、いかなる約束をする力もまたそれを果たす力も失ってしまいます。

パンの祝福の祈りの中で、私たちはさらに「喜びて」という言葉を使います。この力強い言葉について考えてみましょう。何かを喜んでするということは、みずから進んで快く、従順に、そして真心を尽くしてするということです。私はみずからの自由意志でこのことを約束し、心から喜んで実行しています。

7. 「御子の御名を受け、御子を常に忘れず、またその下したまえる^{いましめ}誠命を守ること」

パンの祝福の祈りの中で、私たちは自分自身に御子のみ名を引き受けるという決意をします。私たちはこの誓約を、はじめバプテスマのときに交わします。(教義と聖約20:37 参照) キリストのみ名を身に受けられるとは、何とすばらしい特権であり、信頼でしょうか。

ジョージ・アルバート・スミス大管長はかつて、霊界で

祖父のジョージ・A・スミスに会った夢を見たことがあります。ジョージ・A・スミスは、教会の使徒を務めた立派な人でした。彼は孫にこう尋ねました。「私の名前であなたがこれまで何をしてきたかを知りたいのだが。」

スミス大管長は自分の全生涯を足速に振り返ると、笑顔を見せて祖父にこう言ったのです。「あなたの名前に恥じるようなことは何もしませんでした。」

するとジョージ・A・スミスは進み出て、孫をその両腕に抱き締めました。「そしてそのとき、私はこの世への意識を取り戻したのです。私は、何ら恥じることなくそう答えることができたことに対し感謝の涙で枕をぬらしました。」(「インブルूपメント・エラ」1947年3月号, p.139)

まずバプテスマを通して、それから毎週の聖餐会でキリストの御名を身に受けている私たちも、主に抱かれるにふさわしい人々と言えるかもしれません。しかし私たちは何よりもまず、主のみ名によって何をしてきたかを報告しなければなりません。私たちに救いを得させてくれるのは、天が下にこのみ名しかないのです。

では、御子を常に忘れないためにはどうすればよいのでしょうか。安息日がいかに靈感あふれるものであったとしても、月曜日の朝になれば、たちまち世のわずらいが私たちの上にのしかかってきます。主が私たちに毎週聖餐にあずかるよう望んでおられるのは、「忘れる」という人間の性癖を主がよく承知しておられるからではないでしょうか。

もちろん、私たちは頭の中で贖い以外にも様々なことを考えます。しかし、私たちは心の中に主を思い起こす必要があります。主の律法は私たちの頭の中にだけでなく、「心の板に」(II コリント 3:3) 書き留められねばならないものだからです。

8. 「かくして御子の『みたま』常に一同と共にましますよう」

私たちが、御子を「常に」忘れないという誓約を守るならば、主は代わりに、「常に」みたまを注いでくださると約束しておられます。何とすばらしい天からの贈り物ではないでしょうか。生活の中にみたまを感じられなくなったようなとき、あるいは救い主が十字架上で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ27:46) と叫ばれたときのことを書いた聖句を読むとき、私たちはみたまを受けることがいかに重要かということがわかります。

この聖きみたまは、記憶の助け手として(ヨハネ14:26 参照)、私たちがその導きを受けるための条件を満たし、常

に忘れることがないように助けを与えてくれます。天の摂理には、すばらしい霊的な相乗作用があります。すなわち、正しいことをしようとするほど、それができるように祝福され、持てば持つほど与えられるのです。また思い起こそうとするほど、主は私たちが「ことごとく思い起」こせるようにしてくださるのです。(ヨハネ14:26)

私たちは、主の戒めを守ることによって主のみ名を尊び、主を心に留めることができます。では、その戒めとはどのようなものでしょうか。まず浮かんでくるのが神殿推薦状を受けるときに尋ねられる質問です。しかしそれ以上に大切な、はっきりと返答しなければならない質問があるのです。それは、「力を尽くし、思いを尽くして真心から神と人を愛しているだろうか」という質問です。イエスはこうに言われました。「わたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。」(ヨハネ14:23)

9.「アーメン」

これは、厳粛な証印の言葉です。この言葉を、共に声を出して言うことにより、信者としての一致がもたらされます。聖餐のすばらしい祈りの言葉に注意深く耳を傾けたあとで、私たちは同意を表わす正式なしるしとしてこの言葉を使います。

聖餐にあずかることは、聖徒同士の交わりだけでなく、主ご自身との交わりをも深めることになるのです。主は近代の啓示の中で、義人たちの大いなる集いについて予言しておられます。その集いにおいて、主はみずから再び聖餐にあずかると書かれています。そこに集う人々の中には、モロナイ、エライヤス、バプテスマのヨハネ、エライジャ、エジプトに売られたヨセフ、ヤコブ、イサク、アブラハム、アダム、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そして「わが父がこの世の中よりわれに与えたまいしすべての人々」(教義と聖約27:5-14)がいます。私たちもこれら祝福された忠実な人々の中に数えられるよう、ふさわしい状態で聖餐にあずかりたいものです。そうすれば、私たちはそのみ名を尊んできた御父のみ腕に再び喜んで迎え入れられることでしょう。□

*ジョン・S・タナー：ブリガム・ヤング大学英語学助教授、BYU 第111ワード部監督

話し合いのために

「聖餐の祈りについて思うこと」を個人あるいは家族で読んでから、以下の質問や概念について考えてみましょう。

1. 聖餐式の礼拝に欠かせない親交の絆はどのようにした



パンの祝福の祈りの中で、私たちは自分自身に御子のみ名を引き受けるという決意をします。キリストのみ名を身に受けられるとは、何とすばらしい特権であり、信頼でしょうか。

ら深められるだろうか。

2. 聖餐は私たちに、なぜ御子の愛だけでなく御父の愛をも思い起こさせてくれるのだろうか。
3. どのようにしたらもっとよく主のみ名を引き受けることができるだろうか。
4. 聖餐にあずかる人々に約束されている祝福を受けるには、どんなことをしなければならないだろうか。
5. 聖餐の祈りの間に交わす誓約と、それらを守るときに天父がかなえてくださる約束を思い返し、次の日曜日に受ける聖餐に備えなさい。また聖餐の儀式の間、それらの誓約に思いをめぐらしなさい。

アビー・ルース

彼女の誕生は、
悲劇ではなく祝福となりました

デブラ・ハギンズ・ベアード

「赤ちゃんの状態ですが、思わしくありません。」医者の重々しい言葉が返ってきました。

私は医者言葉を受けた夫のランディーを見て、お腹の子供が、かなり悪い状態にあることがわかりました。

頭に水のたまる病気、「脳水腫」というのが医者の診断でした。この病気による脳の損傷の程度は、いつからそうした状態になったかによって違ってくるのです。医者は今までの検査では頭部肥大は認められていないので、それほど前からではないと断言してくれました。しかし取るべき方法はただひとつ、緊急に帝王切開をすることでした。

医者は単調な低い声で話を続けました。まずこの帝王切開には「相当の危険」が伴うということ、そして私のようなケースでは、母体を救うために子供を犠牲にすることもあるという話でした。

夫のランディーは、私とお腹の子供に祝福を授けてくれました。彼は1カ月ちょっと前に長老になったばかりで(私たちは2週間前に神殿で結び固められたばかりでした)、彼にとってはこれが神権を行使する初めての機会となりました。私は神権を行使するにふさわしい者になろうと懸命に努力している夫に対し新たな感謝の気持ちを持ってその祝福を受けました。祝福を受けたあと、私は間もなく安らかな気持ちになり、子供も自分も助かるという確信を得たのです。

「私は罪悪感に襲われました」

私は手術室に運ばれていくところまではかすかに覚えているのですが、そのあとのことはまったく覚えていません。次に私の耳に聞こえてきたのは、遠くで泣いている赤ちゃんの声でした。「女の子ですよ。会いたいでしょ。」看護婦が声をかけてくれました。

私は固く目をつぶってしまいました。突然、恐ろしくてとても赤ちゃんの顔など見られないという気持ちに襲われたのです。事の成り行きに自分を適応させることができず、

ろうばいしてしまったからです。だまって赤ちゃんを連れていってもらった私はほっとすると同時に、ひどい罪悪感に襲われました。

夜中の1時半ごろ、私は突然目を覚めました。病室は暗く、窓から差し込む満月の明かりだけがあたりを照らしていました。私は看護婦を呼び、焼きつくような痛みを何とかしてくれるように頼みました。それから、子供に会わせてほしいと頼みました。看護婦に連れて来られた我が子を見て、私が最初に思ったのは、「アンジェラにそっくり」ということでした。私たちの長女のアンジェラに実によく似ていたのです。頭は少し大きくなっていましたが、私にはとてもかわいらしく見えました。

看護婦が赤ちゃんを連れていったあとも、私はベッドの上でしばらく起きていました。頭はぼんやりとしていましたが、ずきずきと痛む心の中を様々な思いが駆けめぐりました。「父よ、お願いします。どうか私の赤ちゃんを助けてください。」私は主にそう嘆願しました。

その晩、私は泣きながら長い眠れぬ夜を過ごしました。気がつくと、暗やみは薄れ、窓越しに朝の光がもれ始めていました。

「脳がない」

その日、ランディーと私は朝からずっと、神経外科医が私たちの子供の検査結果を持ってくるのを待っていました。夜の10時半になってようやくやって来た神経外科医は、沈痛な面持ちでこう切り出しました。

「お宅のお嬢さんには、通常の生活は望めません。」そしてきっぱりとこう言いました。「脳がないんです。」

そのときの私たちの気持ちを言葉に表わすことはできません。私は、夫のランディーと私の苦痛に気づかないかのように淡々と話し続ける医師の言葉に、ただぼう然とするだけでした。

「脳が形成されていないんです。生命維持に最低必要な脳



天 父の助けによって、私たちはアビーのことを、愛と信仰について学び、成長していくための機会を与えてくれる存在と考えるようになりました。

幹だけはなんとかありますがね。脳幹は、心臓や呼吸器、消化器、反射神経など、不随意器官をつかさどるものなんです。ですから寝返りをしたり、這ったり、歩くことはできません。どんなに努力してみても無理でしょう。目も見えませんが、耳も聞こえません。どんなことをしても、人に反応を示すということはないはずです。食物はチューブを通して送りこむしかありません。」

生きられてもせいぜい半年というのが医師の見方でした。

医師が病室を出て姿を消したときに、赤ちゃんに対して抱いていた私たちの望みもすべて消えていきました。ランディーと私は抱き合いながら、くじけそうになる気持ちをかろうじて支え合いました。私たちは、彼女の成長の遅れはある程度覚悟し、そうした知らせを受け入れる用意はできていました。しかしこんな結果になるとは夢にも思っていなかったのです。私たちはこの世の苦しみがすべて自分たちの上にのしかかってきたように感じました。

アビー・ルースと名付けた私たちの赤ちゃんが生まれてすでに3日たっていましたが、私はまだ数回しか抱くことができず、何よりも大切な親子の絆がまだできていませんでした。その晩遅く、私は自分では認めたくないと思いつつも、ある決断をしなければならぬと心に強く迫るものを感じ、集中治療保育室にいる彼女のところに降りて行きました。そして彼女のベッドのそばに立って、ぼんやり宙を見つめる彼女を見ていました。そのときひとりの看護婦がやって来て、私のそばに立ちました。私は絶望的な悲しみを感じながら首を横に振りしました。

「霊はわかっているはず」

「かわいそうに。この子は何が起きているのか何もわかっていないのね。」私は静かに尋ねました。

するとその看護婦は私の方を振り向き、きっぱりこう言ったのです。「頭ではわかっていないでしょうね。でも霊はわかっているはずよ。」

この簡潔な言葉に、私は大きな衝撃を受けました。なぜもっと早くそのことに気づけなかったのでしょうか。

その晩遅く、私は夢を見ました。白いゆったりした服に身を包んだ、長いしなやかなブロンドの髪をした若い美しい女性が、私にあいさつをするかのように両腕を広げながら、霧の中をやって来るのです。私はそのとき、時が来てこの世を去るとき、アビーはそこで完全な姿で私を迎えてくれるのだということを悟ったのです。そのことを悟った今、危険な状態にある彼女にどうして背を向けるようなことができるでしょうか。

家に戻ってから、私たちは、アビーが神経外科医が言っていたよりもずっと多くのことに反応を示すのを知りました。しかし彼女の頭は間もなく、急速に肥大していき、つ



悲

しみのあまり天父にすがり、熱烈な祈りを捧げたとき、明確な答えが与えられ、心の痛みが和らげられました。

いには余分な液を取り出すためのチューブを取りつけなければならなくなりました。医者から見ればそれはあまり意味のない手術だったかもしれませんが。しかし私たちにとって、何もしないでいることは、じわじわと苦しみながら死に向かう娘をじっと傍観しているのと同じことなのです。そのようなことにとうてい耐えられるはずはありません。さらに悪いことに、彼女は心臓に雑音があり、その手術に耐えられるかどうか分からない状態になっていたのです。私たちは絶望的になりました。しかし、もうほかに方法がないこともわかっていました。

アビーは立派に手術に耐え抜きました。それは実に驚きでした。彼女を生き永らえさせたものは何だったのでしょ

うか。手術後、彼女の食欲は増し、体重も増え始めました。再び家に戻って来た彼女を見てすぐにわかったことは、聴覚があるということでした。私たちはとても勇気づけられました。しかし間もなくそれは、祝福というより問題であることがわかりました。彼女はかすかな物音にも荒々しい反応を見せるのです。部屋に入り、やさしく話しかけて

みても、彼女は血相を変え荒々しく金切り声をたてるだけでした。周囲の物音が何を意味するのかを判断できない彼女にとって、それらはただ恐怖でしかなかったのです。

「どうすればいいのだろう」

こうして、私たちにとってつらい夏が始まりました。アビー・ルースは来る日も来る日も、ひと晩中起きたまま、私もランディーも気が変になるのではないかと思うほど泣き続けたのです。朝方の5時、6時まで泣き続け、それからやっと寝入るという日が幾日も続きました。しかも寝入ったあとも、10時半か11時にはどうしても様子を見に行かなければならないのです。死んでしまったらどうしよう。どうすればいいのだろう。そんな思いとともに、そうした状況にどう対処するかが、ほかのふたりの娘に大きな影響を与えることを私は十分に承知していました。しかしもうその重圧にも耐えられないところまできていました。

そしてついに、私は完全にダウンするのも時間の問題というところまできてしまいました。9月の終わり近くになって、私たちは何らかの助けが得られればと、障害者のための州立訓練学校で指導的な立場にある人と会う約束をしました。

州立のその学校の職員たちは非常によく理解を示してくれました。私たちはやっと、自分たちが味わってきた苦勞を本当にわかってくれる人々に出会ったのです。学校側は、私たちが休息を取れるよう、彼女を一週間預かることを申し出てくれました。

しかしその週末には、再び同じことが繰り返され始めました。彼女は昼夜を分かたず泣き続けるのです。私たちはゆりかごのそばに立って、あるいは彼女を抱きながら一緒になって泣きあかすこともしばしばでした。「何ていう生活かしら。」私は自分の無力さを感じながら、いつ終わるとも知れない状況にそうつぶやかざるを得ませんでした。上のふたりの娘たちは親に注意を向けてもらえないことにいら立ち始め、私たち夫婦の間にもその影響が出始めていました。

「私は答えを受けました」

私たちはもうひとつ大きな決断を迫られることになりました。しかしそのことでランディーと私は意見が食い違っていました。彼は、訓練学校にアビーを預けることは、彼女を見捨てることになるというのです。私の方は、そうすることが通常の生活に戻り、家族として生活を続けていける唯一の方法であると考えていました。彼女が求めている24時間の世話に応じ続けることは、私にとって不可能なことでした。

彼女に対する裏切りの気持ちにさいなまれながら、私は

悲しみのあまり天父にすがりました。天父はすべてをご存じのはずでしたが、私はある晩遅く、すべての思いを天父に話しました。今までにない長い、熱烈な祈りとなりました。やっと祈りを終え、精力を使い果たした私はベッドに入り、枕によりかかって暗やみを見つめていました。

私が答えを受けたのはそのときです。実に明確なわかりやすい方法で答えが与えられました。私は心の痛みが和らげられ、穏やかな気持ちになりました。そして、アビー・ルースを訓練学校に預けるべきであること、彼女のことは心配する必要がないこと、私たちがその学校に彼女を預けることにした理由を彼女がきっとわかってくれることなどに対して、強い確信を得たのです。

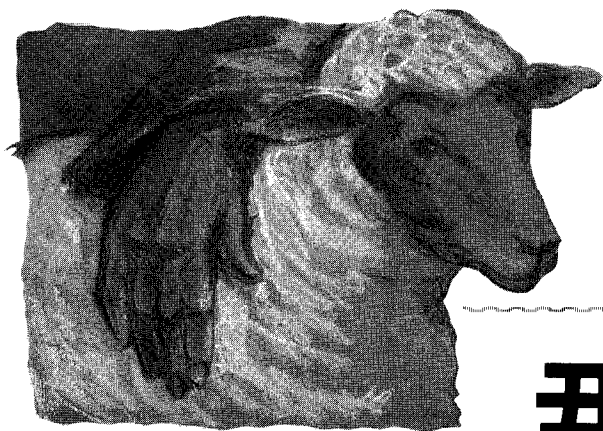
同じような状況にあっても、私たちとはまた違った別の導きを受ける人もいることでしょう。しかしはっきりと言えることは、私たちの得た答えが天父から与えられたものであるということです。また私たちには、天父が我が家の状況をよくご存じで、私たちがふさわしい行動を取れるよう導いてくださったという確信があるのです。

1980年11月1日、私たちはアビーを州立訓練学校に預けることになりました。彼女をぎりぎりまで家に置いていたことに対して、私たちは少しも後悔していません。なぜなら、そうすることによって、彼女が完全に私たち家族の一員となれたからです。

アビーの誕生に至るまでの様々な出来事を振り返ってみると、天父は私たちの試練をできるだけ負いやすいものにしてくださることがわかります。現在私たちの所属するワード部には親切的なやさしい人々が大勢います。また監督もすばらしい方です。監督は、福音と誓約とに私たちの心を向けさせ、励ましを与えてくれました。私はこれらの数々の祝福に対する感謝の気持ちを決して忘れません。

天父の助けによって、私たちはアビーのことを、愛と信仰について学び、成長していくための機会を与えてくれる存在と思えるようになりました。彼女は、家族が永遠に一緒になるための大きな動機づけを私たちに与えてくれたのです。□

編集者から：病名が無脳症というアビー・ルースは、ユタ州アメリカンフォーク州立訓練学校で今なお健在である。彼女は条件反射的に物音に反応を示すが、最近ではよほどのことがない限り、物音に泣き声を立てることはなくなっている。彼女は頭を持ち上げる以外、自分で体を動かすことはできない。彼女の場合、発達した脳はないが、ほかの重要な器官は正常に機能している。話しかけられると笑うこともある。ペアード夫妻には、アビー・ルースのあとふたりの息子が生まれ、どちらも何の障害もなく健康に育っている。



群れに戻る

七十人第一定員会会員
ハートマン・レクター・ジュニア

19 85年12月22日付けの「チャーチニュース」で、大管長会は教会から遠ざかっている人々、また正会員資格剥奪や破門などの処分を受けているすべての人々に対して、再び教会の交わりの中に戻るようにと、特別の呼びかけをしました。この呼びかけは、すべての教会員がさらに大きな喜びを味わうことができるようにとの願いを込めて出されたものです。なぜなら教会員が真の幸福をつかむには、戒めを守る以外に道がないからです。主はこう言われました。「もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである。」(ヨハネ13:17)

主は私たちすべての教会員に対して、教会から遠ざかっている人々に、その理由のいかんを問わず、助けの手を差し伸べるように望んでおられます。再活発化は、この神権時代も含めてあらゆる神権時代において、教会が直面してきた最も重要な問題のひとつです。モルモン経の三人の見証者は、確かに神の天使から版を見せられ、見聞きしたことを記録せよと命ずる神のみ声を聞きました。しかし、これほどの証を強める経験をしながら、3人とも感情を害し、不満を抱いて教会から離れていきました。それでも後になってふたりは教会へ戻ってきました。最初に組織された十二使徒定員会の会員も、12人の内7人が背教し、破門されています。後に3人は再び水のバプテスマを受けて教会に

戻り、活発になりましたが、4人は戻りませんでした。

イエスは昔、地上でその使命を果たし始めたころにも、やはりこれと同じ問題を心に掛けておられたようです。ルカによる福音書第15章の中で、イエスは人々が教会から足を遠ざけ姿を見せなくなる3つの原因をあげ、再活発化を促す方法を少なくとも3つ提案しています。それが3つのたとえ話のテーマです。(1)失われた羊(ルカ15:4-7)、(2)失われた銀貨(ルカ15:8-10)、(3)放蕩息子(ルカ15:11-32)

失われた羊

このたとえ話の羊がいなくなってしまったのは、おそらく群れから迷い出てしまったからではないでしょうか。多分この羊には自分から群れを離れようという気持ちはなかったと思います。知らず知らずのうちに離れてしまい、自分がどの方向に進んでいるかに注意しなかったのでしょうか。あなたが自分から出ていって、そのような羊を見つけるのです。そして向きを転じさせ、群れに連れ戻すのです。多くの羊は無事に群れに戻れたことを心から喜ぶでしょう。

失われた銀貨

このたとえ話では、持ち主自身の不注意で銀貨が無くなっています。持ち主はみずからの不注意で、お金を無くしたことに気づいたら、それが見つかるまで熱心に捜さなければなりません。

末日聖徒のある若い父親の場合を例にあげましょう。彼は最初の子供ができたことを知り合いに伝える場合のアメリカの一般的な習慣にならって、たばこを一箱買い、その1本を監督に渡しました。すると監督はその父親の目の前でたばこを引きちぎり、くずかごに捨てました。

この思いやりに欠けた行ないに深く傷ついた彼は、二度と教会には来なくなりました。そして、その子供も孫も皆、教会とは無縁の世界で育てられたのです。

私は、この監督にも、彼が教会に来なくなったことに対する責任の一端があると思います。失われた「銀貨」を見つけるまで捜し求めるべきだったと思います。もしその思いやりに欠けた行ないに対してすぐに謝罪をしていたら、相手の父親も教会に戻り、前よりも強い教会員になっていたことでしょう。

このたとえ話は、ほかの人を傷つけた場合は、それを謝罪するか、失われた「銀貨」が見つかるまで捜し求める責任があることを教えています。

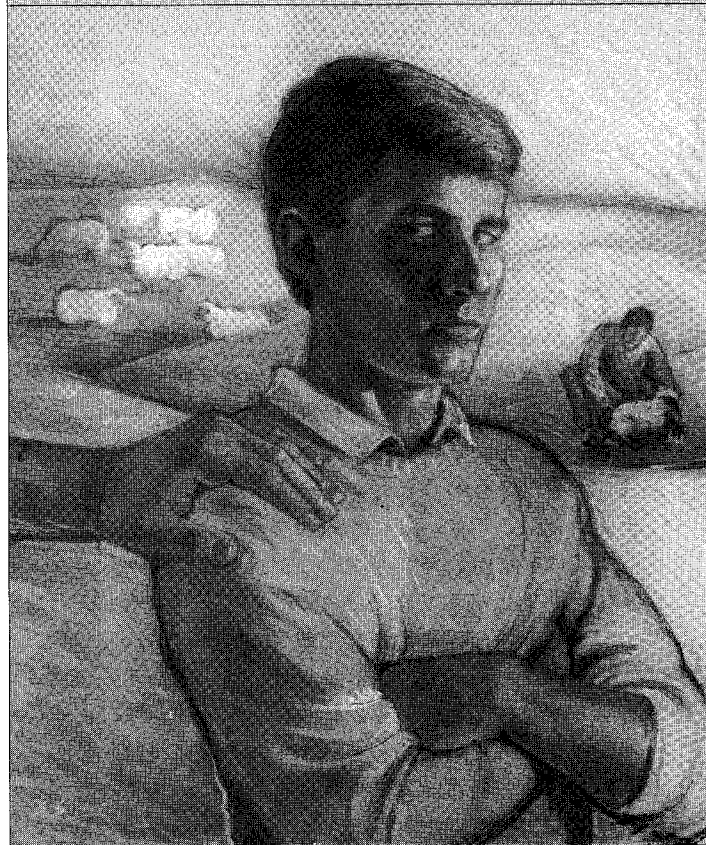
ほうとう 放蕩息子

3番目の話に登場する若い息子は、みずから望んで群れを離れていきました。彼の場合は、さ迷い出たのでもなく、父親の不注意で失われたのでもありません。彼は自分で計画して家を出たのです。説得されてもすぐに戻るようなことはなかったでしょう。彼のような人の多くは、罪の結果として大きな苦しみを身に受けるまで、群れの中に戻ることはありません。このたとえ話の中でも、彼が家に戻ろうと決心したのは、苦しんだ末に、自分がしたことの意味を悟り、「本心に立ちかえ」ったときでした。

このような場合の私たちの責任は、群れに戻ってくる人を迎え入れる準備をし、できるだけ彼らが戻りやすい状況を作っておき、自分が求められている場に立っていることです。ただし、最後の1コドラントを支払うまでは、悔い

主

は私たちすべての教会員に対して、教会から遠ざかっている人々に、その理由のいかんを問わず、助けの手を差し伸べるように望んでおられます。再活発化は、この神権時代も含めてあらゆる神権時代において、教会が直面してきた最も重要な問題のひとつです。



改めの祝福にあずかることはできないと言い立てて、愛のかけらも見られない態度で立っているようではいけません。

たとえ話の中の父親は、「まだ遠く離れていたのに」彼をみとめたと書かれています。金の無心に帰ってきたのだらうと思ったかもしれません。しかし父親は走り寄り、首を抱いて接吻したのです。息子を責めるような言葉はひと言

私 たちが示せる最高の愛は、
兄弟姉妹への裁きを慎むことです。
そうして初めて、彼らに手を差し
伸べ、教会の交わりの中に連れ戻
すことができるのです。



も発しませんでした。私たちは互いに愛を示し合うよう強く求められています。天父はその愛を永遠の赦しとして私たちに非常に明確に示しておられます。主のみ腕は1日中私たちに向けて差し伸べられているのです。神はこう約束しておられます。「たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊

の毛のようになるのだ。」(イザヤ1:18)

忠実な兄に語った「わたしのものは全部あなたのものだ」という父親の言葉を見て、弟よりも兄の方がずっとよい状態にあったと考える人もいることでしょう。しかし、兄の態度は思いやりのあるものとは言えません。愛がなければ、私たちは「空しい者」なのです。(モロナイ7:46参照) 主がこのたとえ話をされたのは、兄と弟の優劣を示すためではないと思います。ふたりとも足りないところがたくさんあります。このたとえ話の主眼点は、御父の慈愛を示すことだったのではないのでしょうか。神の愛がなければ、私たちは皆失われた者になってしまうのです。

私はルカが記録したこの物語が、ここで終わってしまったとは信じたくありません。私が望んでいる結果はこうです。兄が父に次のように言います。「父よ、もう一度あなたの財産を分け、弟にその取り分を与えてください。」そして、父親がこう答えるのです。「わが子よ、今度はあなたのためにもう1匹子羊をほふろう。あなたも生き返ったのだから。」

最も大切なもの

そうです、「キリストの純粋な愛」こそ最も大切なのです。それは「いつまでも消え失せることがなく」、「永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。」(モロナイ7:46, 47)

私たちが示せる最高の愛は、兄弟姉妹への裁きを慎むことです。そうして初めて、彼らに手を差し伸べ、教会の交わりの中に連れ戻すことができるのです。

ヤコブの次の言葉を心に留めてください。「わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち、真理の道から踏み迷う者があり、だれかが彼を引きもどすなら、かように罪人を迷いの道から引きもどす人は、そのたましいを死から救い出し、かつ、多くの罪をおおうものであることを、知るべきである。」(ヤコブ5:19-20)

多くの罪がおおわれると書かれていますが、その中には私たち自身の罪も含まれています。私たちは終わりの日にそこから祝福を得ることができるのです。□

私たちの 祈りの中に

カーステン・クリステンセン

「こんなこと宣教師訓練センターではひと言も聞かなかったわ。」私はこごえた重い足を引きずって、同僚と一緒にデュッセルドルフ(西ドイツ西部の都市)の薄暗い路地裏を歩きながら、そのことばかり考えていました。

宣教師訓練センターを出てから、まだ1週間もたっていないときでした。文法、単語、レッスンプラン、聖典を学び、みたまの力を日増しに強く感じながら過ごした訓練センターでの2カ月は、緊張感と喜びに満ちたすばらしい日々でした。私の耳の底には、伝道地で待ち受けている大きな喜びや、福音を受け入れた人々がどう変わっていくかについて語ってくれた教師や教会幹部の話が残っていました。

その日私はチラシ配りをしながら、自分の期待を裏切られたという気持ちでいっぱいでした。福音は人の生活を変えと言いますが、私の伝道によって、生活が変わった人といえば、結局私自身しかいないのです。しかもその変化は、アリゾナの穏やかな陽光の世界から冬のドイツへ、また以前の自由な生活から疲労困憊するまで体を使う厳しい規則づくめの生活へという変化だったのです。

聞く耳を持たない人々に来る日も来る日も話しかけていく生活の中に、一体どんな喜びがあるのだろうか、真理を伝えるとは言っても、まともに話もしないうちにドアを閉ざしてしまう人々の生活をどうして変えることができるのだろうか、私には理解できないことばかりでした。中でも特に強く思っていたのが、約束のみたまは一体どこに行ってしまったのだろうかということでした。アルマやサウルの心を和らげ、正しい人々に正しい言葉を伝えるようにアンモン、アロンなどの宣教師を導き、アビナダイやレーマン人サムエルに迫害や反対にめげず前進していく説得力と民への愛を授けたあの約束のみたまは存在するのだろうか、私は納得できない気持ちでいっぱいでした。

私はその地の人々が好きになれませんでしたし、伝道そのものにも喜びは見いだせませんでした。そして励まし力づけてくれるみたまを感じることもできませんでした。

私は涙をこらえてとぼとぼ歩きながら、少しの間でも苦しみを忘れたいと、故郷のアリゾナに思いをはせてみました。絶望と混乱のそのときに、私の脳裏にひとつの情景がありありと浮かびました。それは父と母がベッドのわきにひざまずいて頭をたれ、熱心に祈っている姿でした。ふたりは「神よ、私たちの娘を祝福し、気落ちすることのないように守りを与え、神の道を歩めるよう導いてください」と私のために祈っていました。

両親の姿が消えると、今度は100人ほどの人が次から次へと出てきました。その中には我が家の兄弟や妹、親戚、友達、ワード部の会員などもいましたが、皆私のためにひざまずいて祈ってくれていました。時計に目をやると、アリゾナでは夜明けを迎えた時刻でした。そして私は、ちょうどその時刻に、彼らが私のために祈ってくれているのだと悟りました。彼らの祈りは確かに聞き届けられ、温かな愛の心が、私の後ろ向きな気持ちをすべて消し去ってくれました。私は故郷の人々と神と自分をつなぐ力強い絆を感じました。

私は以前から求めていたみたまの証を通して、伝道は人間の業ではなく、私たちに道を示すために御子を遣わすほどの愛と知恵を具えておられる御父のみ業であることを理解しました。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」(ヨハネ15:5)

相変わらず雪は降り続き、ドアを開けて迎えてくれる人もいません。でも毎週届く手紙の中に書かれている「あなたのことを祈っています」という言葉を読むたびに、私は確信を新たにしています。それは、人々がすべての愛の源であるお方に捧げる祈りが、主のぶどう園で働く僕たちに恵みの露として下ってくることを理解しているからです。



私 はここえた重い足を引き
ずりながら、約束されている伝
道の喜びは一体どこに見いだせ
るのだろうと考えていました。
そのとき、私の脳裏に愛と慰め
を与えてくれる情景がありあり
と浮かびあがりました。

R.T. BARRETT



7億5,000万人の中のひとり インド に住む末日聖徒の 青少年

ベティ・ヘイル

も しあなたが、自分の通っている学校に末日聖徒があまりいなくて寂しく感じたことがあるなら、インドのハイデラバードに住む14歳の少年、サントシュ・ラミシュがどんな思いでいるか、想像してみてください。何と言っても、彼は人口7億5,000万人の国で、ほんのひと握りの末日聖徒のひとりだからです。

世界の総人口のうち、およそ7人にひとりがインドに住んでいます。インドは中国に次いで世界で2番目に人口の多い国です。そのうち83パーセントがヒンズー教徒、11パーセントがイスラム教徒で、残りの6パーセントをキリスト教徒、シーク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒の順に占めています。

それはともかくサントシュは寂しく思ったり、差別を感じたりしているのでしょうか。

そんなことは少しもありません。サントシュはこう言っています。「学校の友達はコーヒを飲まないことでほくをからかったりしますが、宗教は自由です。インドはたくさん人の言語や文化、伝統が入り混じった国なんです。」

この言葉はサントシュの国をおおよそ要約しています。インドには土着の主要な言語が14あり、少数派の人々の言語は1,000以上にも上ります。サントシュは主要な14言語のうちふたつを話し、そのほかに英語も自由に話すことができます。



14歳のサントシュ、16歳の姉スニサ、12歳の弟サンジェイは、支部でたった3人の青少年です。でも彼らはとても活発に責任を果たしています。お話をしたり、聖餐の準備をしたり、初等協会で教えたり、証をしたり、3人はなかなか頼りになる存在です。一日の大半は学校の勉強に費やされますが、いつも努力して、奉仕する時間を作っています。

文化の面について言えば、大多数の十代の若者ならば、サントシュの住んでいる社会がかなり変わっていると思うでしょう。インドではデートというものがありません。青少年の活動も、同性の会員だけで行ないます。青少年のパーティーやダンスは前代未聞です。結婚は普通、両親同士の合意の下に決められます。

でも、もしあなたがだれかを好きになってしまったら、どうしますか。

「インドでは、親を見捨てたり、親に逆らったりすることができないのです」とサントシュは言います。多くの若い夫婦は、結婚後も夫の両親と同居します。それでも最近では両親と別居する夫婦が増えています。

サントシュと世界中の十代の若者を結ぶ共通のきずながいくつかあります。ひとつは福音です。サントシュはおじのエドウィン・ダーマ・ラジュ博士を通じて福音を知りました。ラジュ博士はインド政府から派遣されてサモアに赴任していたとき、教会に入ったのです。

ラジュ博士はインドに帰ると、家族にも福音のメッセージを聞かせたいと思い、家族に宣教師を遣わしてくれるよう教会の本部に手紙を書きました。しかしその結果、家族を教えるようにと短期の伝道に召されたのは、ラジュ博士自身とその奥さんでした。

サントシュと家族の何人かが福音を受け入れたのは、サントシュが8歳のときでした。おじのヘンリーが所有しているビルの屋上の貯水タンクを掃除し、ペンキを塗ってバプテスマフォントにしました。バプテスマを受ける兄弟たちは、インドの伝統的な白の、ゆったりしたジャケットとズボンを身につけました。姉妹たちは白のサリーを着ました。サリーはインドの女性の標準的な服装で、1枚の長い布からできており、肩にかけ、もう一方を体に巻きつけて着るものです。新しくバプテスマを受けた家族は、ハイデラバードで最初の支部の会員となりました。

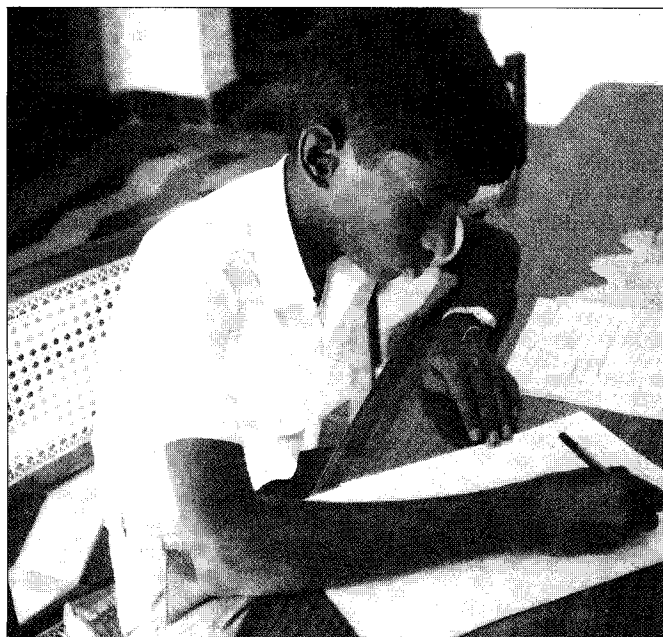
サントシュは、今までその支部のアロン神権の教師をしていました。支部の青少年は、彼と12歳の弟サンジェイと16歳の姉スニサの3人だけです。しかし彼らはとても活発に責任を果たしています。サントシュは毎日曜日、30分前には礼拝の行なわれる伝道本部に行き、聖餐の準備をしています。またお話や、様々な年代向けのレッスンができ



るようにいつでも用意しています。スニサは支部の伴奏者と初等協会の教師をしています。サンジェイはいろいろな責任を持っていて、断食安息日の証会では、よく真っ先に証をします。

サントシュは伝道の準備もしています。「ぼくは伝道のことを何度も想像しました。以前はずっと遠くにある島や、全員を改宗してバプテスマを授けられるような所に行くのが夢でした。でもインドの青少年は、インドで働くように望まれているので、今はこの伝道部で働きたいと思っています。」

サントシュは、医学校に進学する夢も持っています。しかしインドでは医学校に入るのがとてもむずかしく、毎年50,000人の学生が入学試験を受けますが、合格するのはわずか2,000人です。成績がトップクラスの学生だけが入学で



きるのです。

多くのインドの子供同様、サントシュも3歳のときから学校に行っています。そして17歳になれば卒業します。それまでは学問という重い荷を背負い続けるのです。

サントシュの1日は、朝6時前に始まります。家庭教師の授業が1時間あるので、急いで出かけます。私立のキリスト教系の学校では、1クラス40人から70人もの生徒がいるので、4、5人のほかの生徒と一緒に、家庭教師について勉強する時間は欠かせないものになっています。

それが終わると家に帰って、学校に行く仕度をし、世の中の移り変わりに遅れを取らないように新聞を読み、バスに乗って学校に行きます。学校では、数学、物理、生物、3種類の言語など、8時限の授業を受けます。

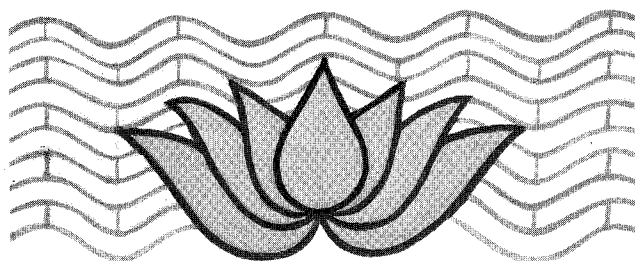
サントシュは、成績上位者と認められた生徒が集まっている10組に属しています。サントシュはほかの生徒に負けないように、クリケットやバドミントンなどの大好きなスポーツもやめなければなりません。学校では成績の

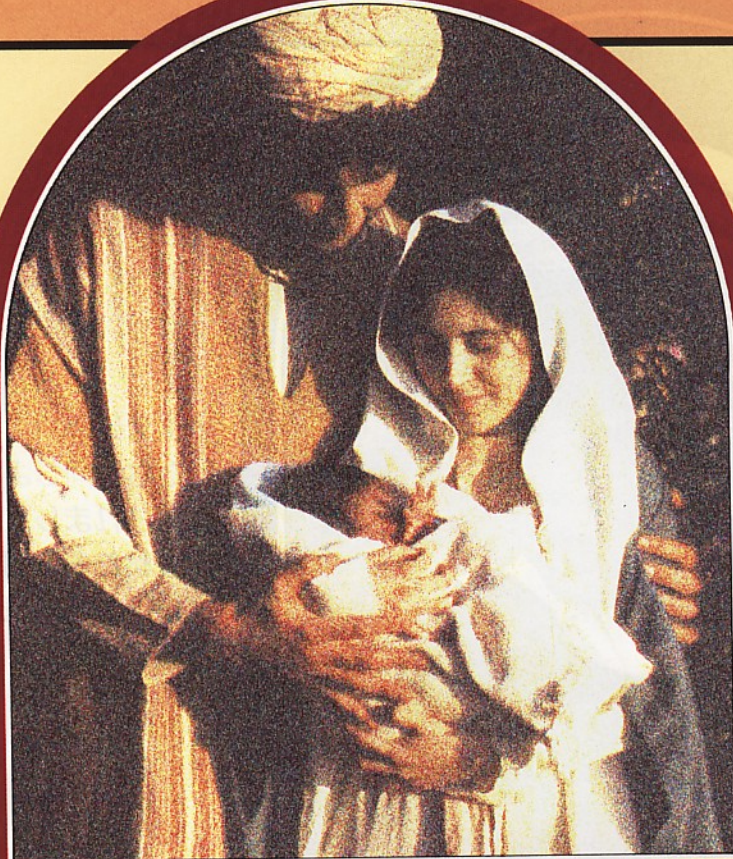
順位を決めるために、毎月の定期試験と3カ月ごとに行なわれる試験を受けなければなりません。

学校が終わったあとは宿題を済ませ、8時の夕食までの少しの間、好きな本を読みます。9時からはまだ家庭教師について、1時間半勉強します。

学校の勉強が一日の大半を占めていますが、サントシュは教会や聖典の勉強のためにも時間を作ります。「ぼくはとても強い証を持っています。このことを天のお父様に感謝しています。モルモン経、聖書、教義と聖約、高価なる真珠はそれぞれを補い合っている聖典で、神様の言葉が書かれている本であることを知っています」と、サントシュは証しています。

このような証があり、そのうえ家族からの援助があるので、サントシュは教会員が少なくとも立派にやっつけられるのです。「ぼくは誘惑に打ち勝つ力を身につけたいと思います。ぼくはこの教会が大好きです。この教会を離れることなんて、考えられません。」□





知られざる 幼年期, 少年期, 成年期

十二使徒定員会会員
ブルース・R・マッコンキー(1915—1985)

かつてパレスチナに、力が強く、活発で知性にあふれたひとりの若者がいました。その若者は人生の盛りに世の罪のために苦しみを受け、十字架上で死すべく定められていました。

私たちは彼を神の御子、この世に生を受けた、ただひとりの完全なお方として知っています。また、彼がその任務を果たしておられたときに行なわれた数々の奇跡、その口から語られた真理、人々に示された知恵と力には、ただ驚嘆するばかりです。

しかし彼はどのようにして成長したのでしょうか。ほかのユダヤ人青年のように、苦痛や悲しみ、病気など、人間として避けることのできないあらゆる苦難を経験されたのでしょうか。

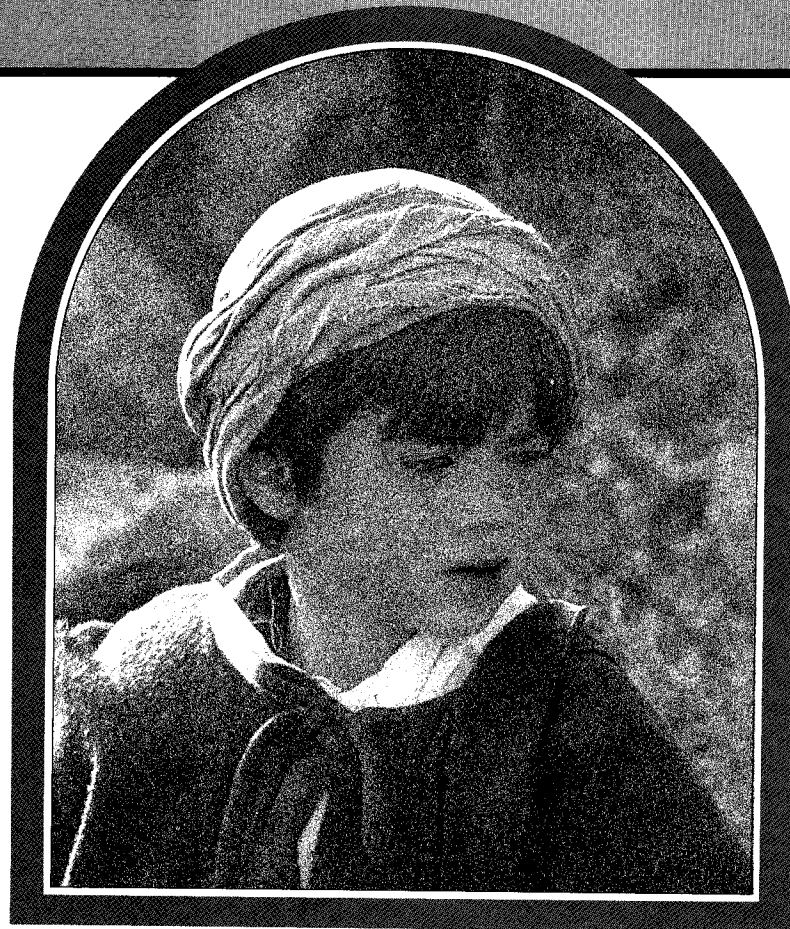
あなたはこのような質問について考えたことがありますか。

——イエスはどこで、どのような状況のもとでお生まれになったのか。

——幼い子供のとき、ユダヤ人の少年だったとき、成長して大人になったとき、イエスはどのようなことをされたのだろうか。

——イエスは、ガリラヤやユダヤ、ペレアに住む若者と同じような生活をしておられたのだろうか。あるいは世間からかくまわれ、神聖化されたような生活をしておられたのだろうか。

——イエスはだれを友人とし、どのような交際をしておられたのだろうか。



イエスは、
私たちと同じように生まれ、
成長されました。
また私たちと同じように
這い、歩き、読み書きを覚え、
祈られました。

私はイエス・キリストとその生涯について、一般にはあまり知られていない数多くの事柄を知っています。それらは聖典にこそ記されてはいませんが、聖書の正典にある確かな事実に基づいて生まれたものです。これらの原則をパレスチナの社会的、文化的状況に当てはめて考えると、どんな意味を含んでいるかが自然と、はっきりと目に浮かんでくるのです。

現世での主がどのようなお方であったかということに話題を移す前に、まずパウロが残したふたつの記述を注意深く、よく考えながら読んでみましょう。パウロはイエスについてこう言っています。「かえって、おのれをむなうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」(ペリピ2：7-8)

また、「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって……祈と願いとをささげ、……御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学ばれたのです。(ヘブル5：7-8)

さて、邪悪で卑劣な王ヘロデが統治していた時代のパレスチナに思いをはせてみましょう。そのころは、皇帝アウグストが課税を目的として人口調査を行なっていました。ヘロデはユダヤ人に敬意を表わすために、彼らをそれぞれの故郷に集め、そこで血族関係ごとに人数を数えました。

このため、共にダビデの家系だったヨセフとマリヤは、

ナザレからダビデの町であるベツレヘムまで129キロの道のりを旅しました。マリヤは身重の体でした。友人や家族を連れ立っての旅は、ゆっくりとしたものでした。彼らはろばを使って食糧や夜具を運び、当時の旅人が使っていたような普通の隊商宿に泊まったものと思われます。

この隊商宿は、正方形または長方形の野営地で、そこには旅人の連れている家畜をつないでおく中庭があり、その周囲の一段高くなった所には、中央に面して入口のついた部屋がありました。部屋は「カタルマ」と呼ばれ、その中で疲れた旅人は、敷物の上や土床の上に夜具を広げました。荷物を運んできた家畜は中庭につないでおきます。近くには必ず水を供給するための泉がありました。またベツレヘムのように、隊商宿が町や村に近い所にある場合には、商売気のある者が何がしかの金をもうけようと、家畜のえさや野菜などの食料を売っていました。食事はたき火にかけて調理し、宿泊する旅人たちの間には、いつももてなしと助け合い、友情の精神が満ちあふれていました。

その晩、ヨセフとマリヤ、そして同行していたガリラヤの人々は、夜もふけて宿に到着しました。カタルマはすべて満室になっていました。このカタルマという言葉はうまく翻訳することができません。これに最も似たものとしては、ヨーロッパで見られる一種のホステルがあります。新約聖書の記述には、「客間には彼らのいる余地がなかったからである」とありますが、ジョセフ・スミスは、客間はほ

かにも何部屋があったと説明しています。カタルマが満室だったため、ヨセフとマリヤは中庭の家畜をつないでおく所、いわば馬小屋の中に床を整えました。家畜やほえ立てる犬、鳴き声をあげる牛やろば、羊の中で、神の御子がお生まれになったのです。いと高き神の子が初めて呼吸をし、この世での生活を始められたそのとき、マリヤの友人や親戚の女性たちが助産婦として仕えました。

イエスは生まれて8日目に、ベツレヘムの家でか、あるいはエルサレムの神殿で、割礼を施され、命名されました。そして生後41日かそれを何日か過ぎたころ、イエスは神殿に連れて行かれ、マリヤのために犠牲が捧げられました。マリヤとヨセフは非常に貧しく、小羊を準備することができなかったので、代わりに山ばとか家ばとのひな2羽を捧げてよいことになっていました。

その後、幼な子がおそらく2歳ぐらいになったころ、東方の賢者が贈り物を持って訪ねて来ました。それから幼な子はエジプトへ行き、しばらく滞在した後、ベツレヘム、そしてナザレへと戻って来ました。

少年時代のイエスが何をし、どんなことを語られたかをすべて知ることはできません。しかしベツレヘムやナザレで、ユダヤ人がどのような生活を営んでいたかを知ることができます。今日でも多くの人々がそうであるように、イエスも貧しい環境の下で育ちました。家の床はすべて土間だったと思われます。また兄弟の数も多く、子供たちは同じ食卓で食事をし、粗末なわらぶとんの上で一緒に眠りました。何人かでひとつの部屋を共有していたに違いありません。食物は粗末で、簡単な、貧しい人々が取っていたものです。着る物にしても、その地方に住むユダヤ人の子供ならだれでも着ているような、素朴な毛織の着物でした。

イエスは、這い、歩き、走るようになりました。言葉を覚え、木に登り、ゲームをして遊びました。ろばやらくだに乗り、やぎや牛の乳を搾り、畑を耕し、種をまき、草取りをし、作物を刈り入れました。また読み書きも覚えました。イエスはユダヤ教会の学校に通い、シェマ（ユダヤ教の信仰告白）を暗記し、祈ることと安息日を守ることを学

びました。またガリラヤの山々を歩き、はとの鳴き声に耳を傾け、きつねの穴を観察し、空行く鳥を眺め、野の花に見入り、羊を憩いのみぎわに導きました。そしてヨセフはのこぎりを使い、くぎを打ち、材木を運んで家を建てることを教えました。

イエスが12歳になったとき、家族と共にエルサレムで行なわれる過越しの祭に行き、神殿の中で祭司や律法学者たちを説き破られました。このとき、イエスはすでに、自分の父は神であり、自分の人生がこの地上のほかのだれとも異なったものになることをご存じだったのです。

イエスの成長期について、特にイエスが神の真理を学んだことについては、聖典に次のように述べられています。

「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」（ルカ2：52）

イエスがその使命を果たしておられるときでさえ、兄弟たちはまだイエスを普通の人だと思っていました。イエスはそのときどきにお腹をすかせ、のどの渇きを覚え、お疲れになりました。イエスはいちじくや魚、大麦のパンを食べました。ごちそうにあずかり、友人の家や、やさしく輝きかける空の星の下で眠りました。また雪が降ったり冬の風が吹いたりすればごこえ、夏の太陽が野の草に照りつければ暑さを感じました。

とがった骨や、鉛の重りがついたローマ式のむちで体を打ちたたかれるとき、イエスは痛みにおののき苦しみもだえられました。またいばらの冠をかぶせられて、その顔に幾筋もの血が流れました。十字架の刑の執行人が打ちつけたくぎで肉が引き裂かれたとき、死すべき人間ならだれでもそうであったように、手と足にどっと劇痛を受けられました。

イエス・キリストは私たちの模範であり、友人であり、私たちのために苦しみ、また仕えてくださったお方です。イエスは私たちと同じように生まれ、そして成長されました。病気や苦痛も経験されました。また私たちと同じように疲れ、空腹を感じ、のどの渇きを覚えました。今の私たちがそうであるように、イエスも世に打ち勝ち、ご自分の救い



救い主は私たちの模範であり、友人です。
キリストに学び、キリストのような生活を送るなら、
私たちはキリストのもとに行き、
永遠にキリストの家に住む特権を得ることができるでしょう。

の達成に努めなければなりません。また私たちと同様、宣教師として働くように召されていました。キリストが真理と正義を最も重んじておられたように、私たちも同じようにする必要があります。

私たちはイエスに従うように命じられています。「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。」（ヘブル2：18）

イエスは言われました。「わたしのもとにきなさい。……わたしに学びなさい」（マタイ11：28-29）と。キリストに学び、キリストのような生活を送るなら、私たちはキリストのもとに行き、永遠にキリストの家に住む特権を得ることができるでしょう。これ以上の報酬を受けることができるでしょうか。□

創造力と末日聖徒

クロフォード・ゲイツ

私 たち末日聖徒が享受している祝福のひとつに、聖霊があります。ジョセフ・スミスが述べているように、この賜は、回復されたイエス・キリストの福音に特有のものであります。しかしこの賜は私たちのためにどのような働きをするのでしょうか。聖霊によって、私たちにはどのような変化がもたらされるのでしょうか。

聖霊が私たちを助ける方法のひとつとして、創造力を豊かにしてくれることをあげたいと思います。

創造力とは何でしょうか。私たちにとってどのように役立つものなのでしょうか。それはすなわち、家庭の主婦にとっては、どうすれば良い妻、良い母親になることができるかということであり、兄弟たちにとっては、どうすれば良い神権者になることができるかということです。また学生にとっては、どうすれば学業において成功することができるかということであり、家を建てるときや庭に植物を植





真に独創的であるというのは、むずかしいことのように思えます。作曲家を例にあげると、使える音符の数はごく限られたものです。過去千年間に書かれた曲をすべて調べてみれば、音符の組み合わせとして考え得るものはすべて発表し尽くされていることがわかるでしょう。私たちの創作に独自性を与えるのは、各自がどういう味加減をするかなのです。

えるとき、そのほか様々なことをするとき、どうすればこれらの仕事を意味のあるすばらしいものにすることができるかを、それぞれ工夫するということなのです。

聖霊についての理解を深め、創造力を働かせる助けとなった経験について、少しお話ししたいと思います。私はこの経験によって人生を豊かにすることができました。私は皆さんにも自分の生活を見直して、どうすればもっと完全に創造的な人生が送れるか、見いだしてほしいと思います。

かけがえのない聖霊の賜

最初の話は、教会歴史からです。覚えておられるかもしれませんが、モルモン経を翻訳しているときに、オリヴァ・カウドリは自分も翻訳をしたいと思います。そこで予言者ジョセフは、それが許されるかどうか主に尋ねましたが、

主は許されませんでした。しかしオリヴァがなおも願い続けたため、主はついにオリヴァが翻訳するのを許されました。

オリヴァがどのように翻訳しようとしたのか正確にはわかりませんが、その試みの結果は、教義と聖約第9章から知ることができます。予言者ジョセフを通して、主はなぜオリヴァの翻訳がうまくいかなかったのかを説明されました。

「^{なんじ}汝はひたすらわれに願いし……〔主はこれを正しいことではないとそれとなく示されました〕

されど……汝心の中^{うち}によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。

されどもし願うところ正しからずば、かかる感な[し。]」
(教義と聖約9：7-9)

この聖句は、私たちに創造力を高めるひとつの方法を示唆しています。それは、最善を尽くし、その後に、靈感によって確認を受けることです。靈感は、私たちの創造への努力を補い完全なものにしてくれます。この靈感は、聖霊の賜を通して私たちすべてに与えられます。予言者だけに限らず、このかけがえのない賜を持っているすべての末日聖徒に与えられるのです。

「有名な」作曲家になる

2番目の話は、個人的なことです。私は8歳でバプテスマを受けてから、間もなくピアノを習い始めました。1年目の課程を終えたころ、私の家は完全に不況のあおりを受け、ピアノのレッスンを続けるだけの余裕がなくなっていました。けれども私は自分でピアノの練習を続けました。

テキストの中の曲を練習するだけでなく、自分で簡単な歌を作曲し始めたりもしました。初めての作品を作るのに、1、2カ月はかかりました。私はその作品の出来栄に気をよくしていました。実際私はわざわざその曲を譜面に書き、「作品1、第1番」と名づけたのです。

母はその曲が気に入る、こう言いました。「学校で先生に弾いてあげてはどうかしら。」確かに私の先生は音楽にあまり詳しくありませんでした。母はこうつけ加えました。「クラスのみんなにも聞かせておあげなさいよ。」こうして私は、ピアノ曲の作曲家として、3年生の間でたちまち有名になったのです。

学校で認められた私は、また曲を作ることにしました。そして数日をかけて2曲目を作り、譜面にしました。その後4年の間に、ピアノのための曲を約10曲書きあげました。

驚くべき発見

そして12歳のとき、私は驚くべき発見をしました。昔のピアノのテキストを見ていて、私の「作品1、第1番」は、実は私が作曲したものではなかったことを知ったのです。その曲はテキストの25ページにありました。私はその曲を自分でも知らないうちに覚え込み、自分の作った曲だとはかり思っていたのです。

私はがっかりしてしまいました。作曲家としての自分の経歴も、この不正で終わりとなるように思いました。けれ

どひとつだけテキストと違っていたところがありました。曲を変調してあったのです。しかしそれでさえ、そんなにむずかしいことはありません。私はほかの9曲はどこから取ってきたのか考え始めました。

1時間ほどかけて、私は自分の持っている楽譜の本にすべて目を通しました。そして「第2番」は「光となるように」から取った曲で、「第3番」についても同じ部分のある曲を見つけました。けれどもこれらの9曲は、「第1番」のように何かの曲と完全に同じということはありませんでした。自分の腕を磨いていくうちに、私はだんだん独創的になり、創造力豊かになっていったのです。

創造の才能

独創性に富んだ表現は、創造力の一部です。私たちが一人一人違うということは、創造の才能の一部なのです。主は2枚の葉をまったく同じには作られませんでした。ふたつあるものもみな違いがあります。一卵性双生児でさえ、明らかに違うところがあるものです。私たちは一人一人自分だけの小宇宙を形成しています。皆個性を持っているのです。私たちには、現世においてこの個性を発見し、創造的に表現するという課題があります。自分の個性を知って、それを独自の形で表現すれば、世の中や教会、地域社会、家族や人々のために何らかの形で貢献するときも、独創的で個性にあふれたものになるでしょう。

「二流の音楽家になってはいけないよ」

さて、さらに4年が過ぎ、3番目の話に入ります。16歳のとき、私は将来どんな職業に就くか考え始めました。私には大学教授の父親を持つ友人がふたりいました。ひとりの父親は物理学者でした。それで私は物理学者か研究専門の細菌学者になりたいと思い始めたのだと思います。

音楽も熱心に続けていましたが、大金を手にすることが出来る音楽家はごくわずかでと知っていたので、音楽家になりたいとは思いませんでした。けれどもよく祈り、いろいろな職業を検討した末、結局音楽家となって世の中で貢献すべきだとの確信を持つに至りました。心の内に燃えるものがあったのです。

私はこのように決断し、音楽家になることを父と母に話しました。父は実業家で、音楽を職業とすることには賛成しませんでした。しかし音楽の道に進みたいと言うと、こ



自

分の作品の出来栄に満足し、その喜びが、ご自身の創造の業を見て「良し」と言われた主の喜びと同じだと思えるときが来ます。

う言いました。「いいだろう。でも二流の音楽家になってはいけないよ。」

そのとき以来、この父の言葉は何度も何度も私の耳でこだましました。そして創造への努力を重ね、一層高い段階に進むように励ましてくれたのです。

数年後、私は優れた音楽の専門学部のある、家の近くの大学に入学しました。1年生のとき、私は作曲コンテストに参加し、1等賞を取りました。賞の一部として、私

の作品はストックトン・カリフォルニア・シンフォニーオーケストラによって演奏されることになりました。しかし残念なことに、私の作品はストックトン・シンフォニーオーケストラよりも大きな編成のオーケストラ用に書いたものだったのです。

私はどうしても自分の作品が演奏されるのを聞きたかったので、100人以上で編成されている大きなオーケストラのある大学に編入しました。そしてその大学での最初の日

に、私はオーケストラの指揮者を部屋に訪ね、大学のオーケストラで自分の作品を演奏してくれるように頼みました。指揮者の返事はこうでした。「そこへ置いていきなさい。私は今忙しいから、来週また来るといい。」

次の週、また訪ねて行くと、彼はこう言いました。「まあ、それほど悪くはないね。月曜の夜に練習して、次の月曜に演奏することにしよう。」

「指揮をやってみたいかい？」

そして指揮者は、まったく予想していなかった質問を私にしました。「指揮をやってみたいかい？」そのとき、もし「君に指揮ができるかい？」と尋ねられていたら、私は違う答え方をしなければならなかったでしょう。でも質問は、「指揮をやってみたいかい？」だったのです。果たして、100人編成のオーケストラで自分の曲を演奏するのに、指揮をしたくない人がいるでしょうか。

私は家に帰り、次の1週間ずっと、オーケストラのパートを調べ、音が本当に正しいかどうか確かめました。音を想像して見ましたが、実際に演奏しているのは聞いたことがなかったのです。

月曜日は授業中もずっと落ち着かない気分でした。昼食ものどを通りませんでした。そして夜になり、私は客席の最前列に座り、シンフォニーオーケストラが練習するのを聞いていました。

とうとう指揮者がこちらを向いて言いました。「自分の曲を演奏してみるかい？ さあ、ここへ来たまえ。」彼は私をオーケストラに紹介し、こう言いました。「彼に指揮をさせるつもりだ。」

私はがたがた震える手で指揮棒を振りました。するとふらふらと音が出始めました。演奏者は手書きの楽譜で演奏するのを嫌いますが、私の楽譜はまったくひどいものでした。オーケストラの音は単調で不安定、まったく身の縮むような経験でした。

「なかなかいいじゃないか」

そして何かが起こりました。曲が最後の数分のところまで来たとき、突然すべてがうまくいき始めたように思えたのです。オーケストラの演奏者たちは、「どうしてこんなに我慢できるのか」と不平を言ったり、そう思っているような様子を見せたりせず、「なかなかいいじゃないか」と言

っているように見えました。

最後の数分の間、私はまるで自分の体が指揮台から1、2メートル浮いているように感じました。私は、「自分はこのために生きてきたんだ。自分が世の中でできる貢献はこれだったんだ」と思いながら、いわば直観的に指揮を続けました。その瞬間、「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」(II ニーファイ 2:25) という聖句が、もはやモルモン経の中の単なる言説ではなく、私にとって現実味を帯びてきたのです。

曲が終わると、演奏者たちから拍手喝さいが起こり始めました。指揮者は通路から駆け寄ってきて、こう言ってくれました。「確かに初めの方はまるでひどかったが、最後は悪くなかったよ。」

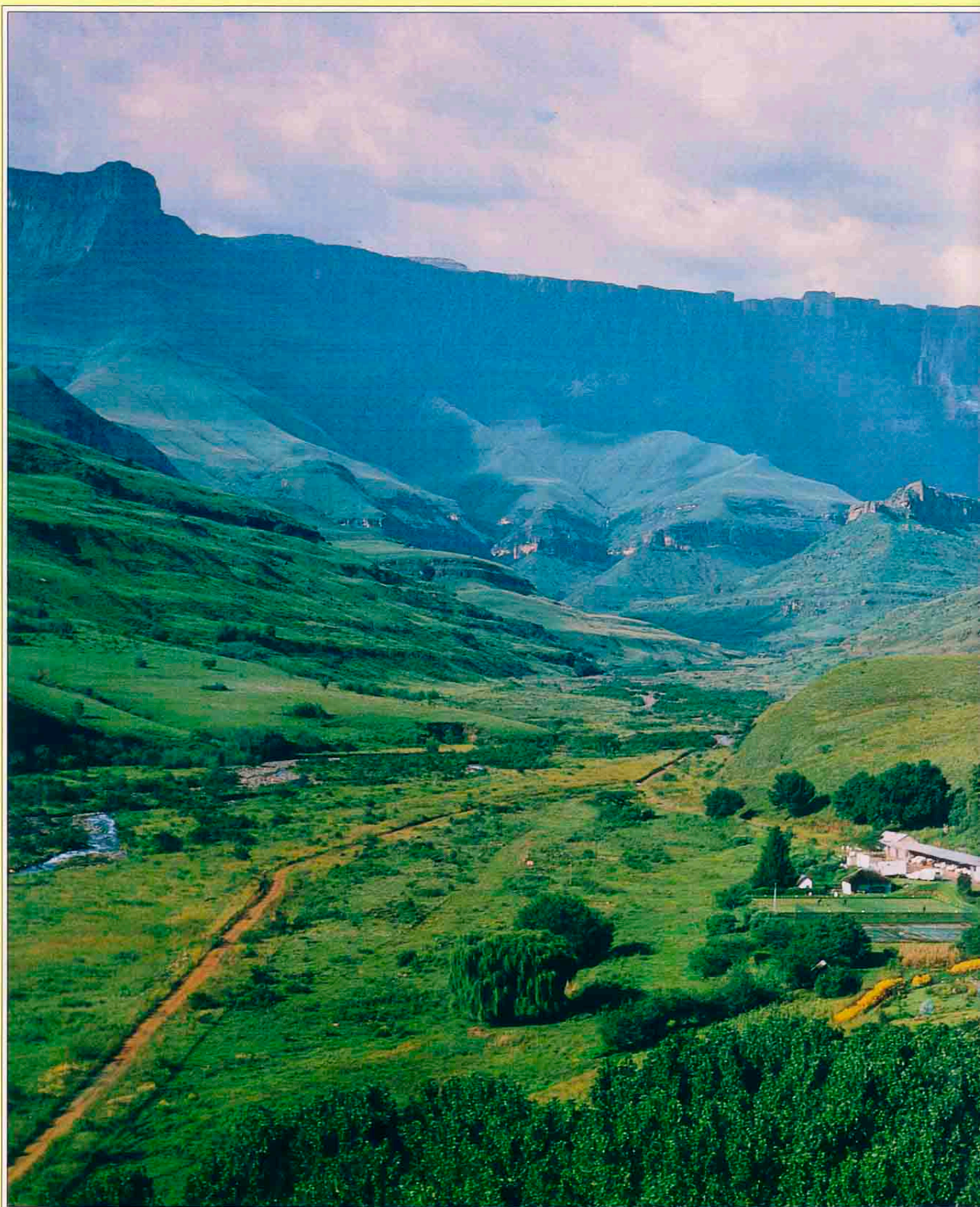
神が存在する理由

その夜家に帰る途中、最初のひどい演奏は忘れてしまい、私の耳にはエンディングのすばらしい大音響だけが鳴り響いていました。主が「良し」(創世 1:4)と言われたときは、きっとこんな気持ちだったのだろうと思いました。主はご自身のみ業について、何と控え目な表現を使われたのでしょうか。神様が存在する理由のひとつは、喜びを得るためです。主は何に喜びを感じられるのでしょうか。創造的な行ないの中にです。美しいものを造り出す行ないの中に、つまり人間を造り出す行ないの中に喜びを得られるのです。

兄弟姉妹の皆さん、この話を皆さん自身の人生に置き換えてみてください。創造力は私たち自身の内から生まれるものです。私たちをそれぞれ異なった人間にしている部分から生まれるのです。家庭で、学校で、仕事をしているとき、遊んでいるとき、もっと創意工夫すれば、私たちの人生はもっと喜びに満ちたものになるでしょう。

聖霊は、自分という人間の中から何が本当の個性なのかを見つける手助けをしてくれます。また、その個性を生かして、自分独自の方法で周りにいる人々に奉仕するための手助けもしてくれます。この世をもっとすばらしい場所にするために、私たち一人一人に与えられた賜を使うことができますように。そうすれば、天父の喜びの幾分かを理解することができるようになるでしょう。□

(ブリガム・ヤング大学教育週間において行なわれた講演を再編集したもの)



教会機関誌に掲載される 扶助協会の 家庭訪問メッセージ

世界中の扶助協会の姉妹たちが、定期発行の教会機関誌に掲載される毎月の家庭訪問メッセージを活用しています。ヨーロッパ、ラテンアメリカ、北アメリカ、アジア、南太平洋などの地域で約20カ国語で発行されている教会機関誌には、年に10回家庭訪問メッセージが掲載されます。年に2回は、ソルトレークシティで開催される総大会の様態を伝える大会特集号が発行されます。その月には大管長会の中から選んだものをもとに家庭訪問メッセージを準備してください。

機関誌の発行スケジュールの違いにより、世界中で同じ月に同じメッセージが掲載されるとは限りません。しかし、中央扶助協会会長のバーバラ・W・ウインダー姉妹は次のように語っています。

「姉妹たちはそれぞれのメッセージがどの月に与えられるかについて心配するには及びません。大切なのは、年に10回メッセージを手にし、それを用いることができるという点です。訪問教師は最新号の教会機

関誌を受けとり次第、そこに掲載されているメッセージを注意してよく読み、次の訪問のときに伝えるようにしてください。扶助協会の地元の指導者は、機関誌を購読していない姉妹たちがいる場合は、コピーを取って彼女たちにも毎月のメッセージを渡せるように配慮してください。

大会報告はどの教会員にも大きな祝福を与えてくれます。その中には大会の各部会で教会幹部が聖徒たちに向けて話された報告、導き、証がすべて載せられています。また、教会機関誌には半期総大会と同じ時期に開かれる女性の大会の話も掲載されます。

私たちは姉妹たちに、大会号を読み、そのふた月は大管長会の話をもとに家庭訪問メッセージを準備するように特に強くお願いします。

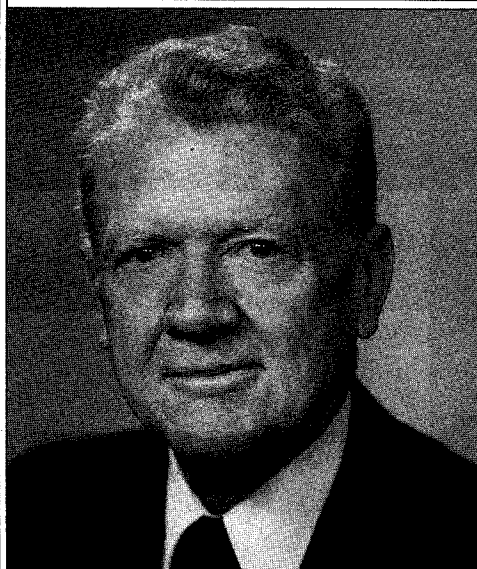
教会幹部の話をもとにメッセージを準備するには、祈りの気持ちをもって読み、最も重要なポイントを選ぶようにしてください。全体的なテーマ、あるいは訪問先の姉

妹に最も適切な教えは何かという点についてよく考える必要があります。一番大切なのは、訪問教師自身が教会幹部の勧告が私たちの生活にとって重要なものであるとの証を持つことです。それから訪問先でその証を分かち合うのです。機関誌に掲載されたメッセージを用いるにしても、大会報告から選んだものを用いるにしても、訪問先の姉妹が必要としていることをよく考えなければなりません。

中には「あの姉妹にメッセージを伝える必要はないと思います。彼女も訪問教師の責任を受けていて、今月のメッセージが何か知っているんですよ」と言う人もいますが、それは間違いだと思います。たとえメッセージは同じでも、それをどう応用するかは人それぞれにまったく異なるからです。その中から質問、アイデア、聖句、実例などを祈りの気持ちをもって選び、訪問先の姉妹に最も役立つ形で用いなければなりません。

単なる訪問ならだれにでもできることです。しかし、訪問教師はほかの人の重荷を負うという誓約を交わした教会員として、主のみ名によって訪問するのです。そうするならば、祝福されて何を言い何を語るべきかを知ることでしょう。それはほかの方法では得られない祝福です。訪問教師が伝えるのは愛と希望と励ましのメッセージです。訪問教師は担当の姉妹に祝福をもたらすために召されていますが、その報いとして自分も祝福を受けることができるのです。

名誉教会幹部ヘンリー・D・テイラー長老(83歳)逝去さる



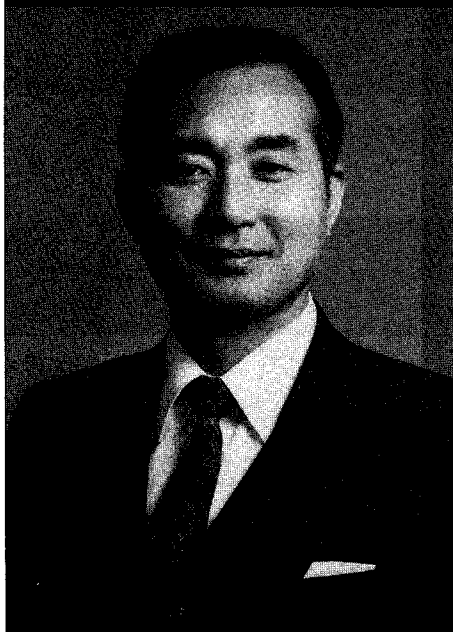
名誉教会幹部ヘンリー・D・テイラー長老が2月24日、ソルトレークシティで逝去された。テイラー長老は1958年に十二使徒評議会補助として支持され、七十人第一定員会会員の責任にあった1978年9月には、名誉教会幹部として教会員の支持を受けた。テイラー長老はユタ州プロボで1903年に生まれ、のちに合衆国東部で専任宣教師としての任を果たした。伝道か

ら帰ってからは学業に戻り、経営管理学などで博士号を受けた。テイラー長老はカリフォルニア州の伝道部長、教会幹部などの責任を歴任したが、それ以前は監督、またふたつのステーク部でステーク部長として働いている。

テイラー長老は前夫人を亡くされ、1968年に再婚している。遺族は現在の夫人と、先妻との間の4人の子息である。

各地のたより

中村晴兆兄弟(大阪北ステークス部長) 地区代表に召される



大阪北ステークスのステークス部長である中村晴兆兄弟(47歳)は、2月21日アジア地域会長のウィリアム・R・ブラッドフォード長老により地区代表に任命された。

また高崎地区と東京北地区を担当していた鈴木正三長老が6年間務めた地区代表の責任を2月23日付で解かれた。

これに伴って現在召されている5人の地区代表の担当地区が一部変更になり、下記のように新たに割り当てられた。

●相良健一長老(〔従来どおり〕札幌地区、仙台地区) ●岡本亮長老(高崎地区、東京北地区) ●浅間玄也長老(〔従来どおり〕東京地区、静岡地区) ●中村晴兆長老(名古屋地区、大阪地区) ●井上龍一長老(〔従来どおり〕高松地区、広島地区、福岡地区、沖縄地区)

地区代表に召されて 主から祝福された20年の結婚生活

大阪北ステークス部長 中村 晴兆

去る2月21日、愛妻と共にアジア地域会長のウィリアム・R・ブラッドフォード長老に呼ばれ、面接を受けました。十二使徒定員委員会代理のハワード・W・ハンター長老からの召しの手紙を示しながら、ブラッドフォード長老は、「あなたを地区代表に召します。ただし次のステークス部大会(5月17日)までステークス部長を兼任してください」と言われました。

「私が力弱者であることを十分ご存じのはずなのに、なぜ主はお召しになるのだろう。」どの地位に召されるかではなく、いかに召しを果たすかが大きな問題であることを自問自答し続けた8年半……。正直に言って、ステークス部長の重責を果たすにはいつも力不足を感じてきただけに複雑な心境でした。

ブラッドフォード長老の面接および按手任命が終わったあとに、私たち夫婦は白髪としわの増えたお互いの顔を見合わせながら、結婚生活20年間の祝福を数えてみました。

今年の3月9日で私たちはちょうど結婚20周年、すなわち人生の一区切りを迎えます。

「貧しく、また力の弱かった私たちは、祈りを通して神様に助けを求めてきました。神様は様々な方法でこれにこたえてくださいました。

過去を振り返ってみますと必ずしも自分の思いどおりに神様はおこたえになりませんでした。しかし今私は神様が自分たちの祈ったことのすべてに、そのとおりにおこたえにならなかったことにとても感謝しております。なぜなら、現在自分が立っている場所が自分の祈ったことや想像し望んでいた所よりもはるかにすばらしい所にいるからです。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。

天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」(イザヤ55:8-9)

神様は全知全能であり、過去・現在・未来を通して私たち霊の子供を知っておられます。私たちが神に背かない限り、人知を超えた最高のものを与えようと準備されています。それを思うとき、私たち夫婦は霊の父に心から感謝し、「命の限り、天父が期待されている使命をこの地上で果たさせたまえ」と願いました。

妻はこれまで、私が教会の召しを果たすうえで払ういかなる時間的、経済的犠牲に対してもひと言の愚痴もこぼしませんでした。

結婚生活20年のうち、1年間のみ支部長



●中村ご家族



②月に召されたJMTC 第93期生6名の名簿

S:ステーキ部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

(写真左より)

<名 前>	<出身地>	<伝道部>
1. 笠井 達也	新潟D/長岡B	神戸伝道部
2. 辻 野 茂 樹	大阪北S/豊中東W	神戸伝道部
3. 久保公利栄	広島S/光W	名古屋伝道部
4. 山本 利 江	東京北S/豊島W	名古屋伝道部
5. 小高 忠 文	高崎S/桐生W	岡山伝道部
6. 橋 輝	大阪北S/京都洛北W	福岡伝道部

として奉仕させていただき、あとの19年間はすべて自分の所属ユニット以外で働かせていただきました。

地方部長、副伝道部長、そして副ステーキ部長として6年間、ステーキ部長として8年半、沖縄、九州、広島、四国、名古屋、北陸と、しゃにむに働きましたが、この召しを無事果たしたのは、主の豊かな導きと、家族のお陰であると感じています。とりわけ7人の子供を抱えて家庭を守る妻は、ステーキ部長以上の重責であったと思ひ、主のみ守りに感謝の念が絶えません。

日曜日、祭日のほとんど、私は教会活動で夜遅くまで奉仕させていただきましたので、帰宅が遅くなったり、また家に帰らないときもしばしばありました。そのようなときでも、妻は忠実に家族の祈りと毎朝の聖典輪読、「家庭の夕べ」を続けてくれました。

そして主は、これまでに9人家族が住まうに十分な家を与えてくださり、仕事では会社の役員（日新航空サービス株式会社取

締役大阪支店長）という経営の一端を担う社会的地位を恵んでくださいました。また物質的な物よりも精神的、霊的導きを求めている私たちに、主は様々な形で祝福してくださいました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ6:33）

最後に、これまで私を導いてくださった先輩の方々、ならびに一緒に奉仕して下さったたくさんの兄弟姉妹、役員の方々に心から深く感謝いたします。特に私がステーキ部長として働かせていただいた8年半の間に、私を支え、助けてくださった6人の副ステーキ部長とステーキ部役員に心からの尊敬と感謝を述べたいと思います。彼らの犠牲は感動的であり、偉大でありました。本当にありがとうございます。

私は今までに数知れぬ兄弟姉妹たちの頭を手にしてお参りしました。神権の聖任、宣教師の任命、監督、支部長、評議員、祝福師の任命、土地の奉獻と建物の献堂など、主がそのみ業を成就するために、私をその器としてお使いになられたことに心から感謝します。決して天父と救い主、およびこれらの兄弟姉妹を裏切ることのないように最後までこの道はずれることなく歩まねばならないと、その重大な責任を自覚しております。信仰とは、忍耐することと謙遜になることであると知りました。

私は天父と御子が実在のお方であり、イエス様は私たちの救い主、贖い主であることを信じています。そして主のいかなる召しであれ、命の続く限り全力を尽くして最後まで果たしたいと願っています。（なかむら・はるよし 1940年生まれ）

氷像彫刻コンテストで 「最優秀室蘭市長賞」に輝く

——室蘭ワード部独身成人の活躍——

新役員の聖任【任命】

2月21日から3月20日までに日本東京管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の異動（敬称略）

●仙台ステーキ部福島ワード部

新監督：早川秀輝（前任者：渡辺正歳）

●新潟地方部三条支部

新支部長：熊谷正行（前任者：古川正博）

●三重地方部松阪支部

新支部長：宮路薫（前任者：井幡康次）

●福岡ステーキ部福岡ワード部

新監督：原三城（前任者：川内健次）

私たち室蘭ワード部では、独身成人が中心となって、室蘭市で行なわれる「むろらん冬まつり」氷像彫刻コンテストに毎年参加しています。今年は2月14、15の2日間開催されました。今年は作業に協力できる人が少なく、参加はあきらめようという意見も出ましたが、たとえ少人数でも絶対参加するべきだ、人数は少なくても必ず完成できるという強い気持ちがあり、参加することにしました。北海道の冬は厳しいですが、雪や氷を使って楽しめること

は北国に生まれ育った者の特権だと思います。

今年の作品は「室蘭駅」にしました。室蘭駅は明治時代からの古い建物で、室蘭市内のめずらしい建築物として知られています。それぞれ仕事や学校が終わった夕方に集まり、4日をかけて制作しました。大きな30個の重い氷を積んでくれた力持ちの兄弟、かじかんだ手で雪と水でシャーベットを作ってくれた姉妹、氷全体に線を引き、駅をかたどってくれた兄弟、細かい部分



●トロフィーと表彰状を手にする室蘭ワード部の独身成人(後列右端は川上輝男監督)●(右)最優秀賞に輝いた氷像彫刻「室蘭駅」

を丹念に彫りつけてくれた姉妹など、お互いによく助け合いました。一人一人がそれぞれの才能をフルに出し合って頑張りました。

一人一人の努力が報われ、思いもよらない「最優秀室蘭市長賞」をいただくことが

できました。新聞にも教会の名前が載り、多くの方が氷像を見に来てくださったので、末日聖徒イエス・キリスト教会を知っていただく良い伝道の機会となりました。

あきらめずに目標に向かって最善を尽くすとき、また一人一人の力は小さくても一

致協力するときに、とても大きな力となることを学びました。「主にあって不可能なことはない」のです。この機会を通して兄弟姉妹に対する愛や神様に対する信仰がさらに深められました。(レポーター：室蘭ワード部セミナー教師・早川則子)

来日した米国下院議員の ノーマン・D・シャムウェイ兄弟に聞く ——米国議会に11人の末日聖徒——

★…北部極東伝道部のころ(1954—1958)に専任宣教師として日本で3年半伝道した経験を持つノーマン・D・シャムウェイ兄弟(52歳)が、米国下院議員として再び公用で来日した折、当時の彼を知る人々が集まり、なつかしい思い出や現況などを語り合い、旧交を暖めました。以下はシャムウェイ兄弟に行なったインタビューです。(聞き手：福田八重子姉妹〔東京ステーキ部ひばりヶ丘ワード部〕)

——下院議員になられたのはいつでしたか。また、どのようなご苦労がありましたか。

「1978年にカリフォルニア州の選挙区から選出されたのが最初で、その後2年で任期が切れるたびに再選されてきました。政治家になるまでは弁護士として働いていましたが、選挙に出馬するために、1年間、様々な準備に駆けずり回らなければなりませんでした。そのために弁護士の仕事ができず、収入がなくなりましたが、その間教会の教えにある食糧貯蔵をしていましたので、

その保存食で生活することができました。選挙にはポスターの作製やテレビ出演などお金がたくさんかかるので、選挙資金として銀行から融資を受けるのが普通です。しかし、私の場合はたくさんの友人がいたので、それをしなくても、必要なときに必要な援助を受けることができました。とても恵まれていたと思います。」

——米国の議会には上院と下院を合わせて何人の末日聖徒がいますか。

「現在11人います。ユタ州から5人、カリフォルニア州から3人、アリゾナ州とネバダ州、アイダホ州からそれぞれひとりです。定員435人の内11人ですからまだまだ少ないですね。」

——モルモンとして、政治の世界でプレッシャーを感じることがありますか。

「私はモルモン教会の信者なのでこうします」と初めから人々に言います。初めはプレッシャーがありましたが、私に対する理解が一度できると、それともなくなりました。夜のレセプションに出る機会が多く、



●ノーマン・D・シャムウェイ米国下院議員(1934年、米国アリゾナ州生まれ。法学博士。下院議員になるまでは6年間監督の責任にあった。6人の子供がいる)

そのような席ではアルコールが出ますが、私はジュースを飲みます。このごろは健康によくないという理由でたばこやアルコールを口にしない人が多くなりましたね。」

——日本で経団連(経済団体連合会)の方々とお会いしたと伺いましたが……。

「30人ほどの経団連の方々と昼食会を持ったとき、ソニーの会長である盛田昭夫さんから『なぜそんなに上手に日本語ができますか?』と聞かれました。それで私は『モルモン教会について聞いたことがありますか?』と聞きましたところ、あるということでした。私は食事をしながら15分ほど教会について説明しました。そのテーブルにいたほかの人々も私の話を聞いて『そうですか、そうですか?』とうなずいていました。そのほかにも日本商工会議所の方や神戸の市長ともお会いして教会のことをお話ししました。日本の経済界、産業界の指導的立場にある方々に教会についてお話しして理解を深めていただけたのでよかったと思います。」

——大変忙しい日々を過ごされていると思いますが、どのように「家庭のタベ」を開いていますか。

「月曜日の晩は仕事を早く切りあげて家に帰りますし、子供たちはそれぞれ夕食前に学校の勉強を済ませて準備します。これは以前と変わりません。このごろは子供と一緒に聖書を読んで話し合います。またときどき公園へピクニックに行ったりもします。」

——神殿には年に何回くらい入られるのですか。

「昨年、大祭司定員会から年間50回の神殿参入のチャレンジを受けましたが、幸いその目標を達成できました。」

——ピアノが大変に上手でいらっしゃると思いますが、いつごろから習われたのですか。

「子供のとき、『自転車のふたり乗りはいけません』と母に言われたのに、それを聞かずに兄とふたり乗りして転び、片手に大けがをしました。手術を受けたのですが、そのけがのために現在でも片方の手が小さいです。そのとき母は指が動かなくなるのを心配して私にピアノを習わせました。そのお陰でピアノを弾けるようになりました。」

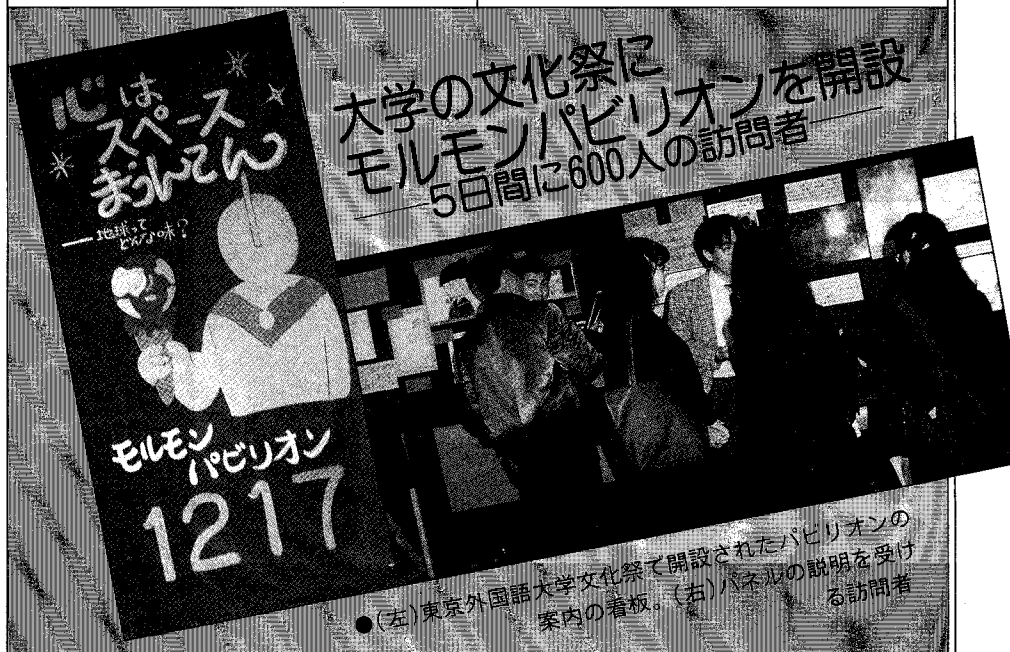
——日本で伝道したのは30年も前になりますが、そのころの思い出にはどんなことがありますか。

「仙台で改宗者を見たあと、伝道本部に入りました。そのとき新訳日本語版モルモン経（現在のモルモン経）を翻訳し、出版の準備をしていました。私はそれほど漢字が読めませんでしたが、それでも印刷業者が持ってくるモルモン経の校正刷りを読みました。佐藤龍猪兄弟たちがおにも読みま

したが、あるとき1度だけ誤った漢字を見つけて佐藤兄弟にそれを伝えました。佐藤兄弟は『ああ、そうですね』と言っていました。それがとても気持ちがよかったです。佐藤龍猪兄弟の先生になったわけですから……。 (笑い)」

インタビュー後記：国会議員ですと通常

護衛がつくのですが、彼はそれを断わり、私の家に来るときもタクシーを使わず電車に乗って来られました。一緒に話をしてもまったく気を使うこともなく、心からリラックスしてお話しすることができました。いつも笑みを絶やさず温かな人柄がしのばれました。



昨年11月20-24日の5日間、東京外国語大学の文化祭で、モルモンパビリオンを開設しました。前年度初めて参加したときの経験や失敗を生かして、できるだけ多くの人々に教会の存在と教えを伝えようと、9月ごろから4人の実行委員を中心に準備を進めました。テーマや目標についてよく祈り、宇宙や自然、人体の神秘さを通して、私たちの存在は決して偶然によるものではなく、人生には目的があることを伝えよう、そしてベンソン大管長の言われるようにモルモン経をたくさんプレゼントしようと決意しました。

2カ月間、連日インスティテュートハウスに通い、聖典、「聖徒の道」、インスティテュートのテキストや先生方からのアドバイスを参考に、人々にとって簡潔で、わかりやすく、魅力ある言葉やストーリーを作ろうとみんな必死に勉強し、考え、祈り、働きました。実際には、宇宙や生命について興味を持つ人々はほとんどなく、その部分は一番時間をかけたにもかかわらず当日は日の目を見ることはなかったのですが、私たち自身が「確かに神が宇宙のすべてを造

られたこと、いかなる科学者もそれを否定することはできないこと」を一層はっきりと知ることができました。また、すべての人々が神の子供であり、私たちの役目はそれを「教える」ことではなく、「思い出させる」ことであること、そしてモルモン経は昔に書かれたものではあっても、その時代の人々のために書かれたのではなく、この末日に生きる私たちのために取って置かれた特別な書物であることをもう一度しっかりと胸に刻みつけることができました。

初日の朝、すべてのパネルの準備が整って、宣教師と兄弟姉妹とが輪になってひざまずき、その中でインスティテュートの教師である池内兄弟が奉献の祈りを捧げてくださいました。

そしていよいよオープン！ 何しろ食べ物屋の企画ばかりの中でこれだけの準備をして発表し、しかもプレゼント（モルモン経）つきなどという所はそうありませんから、強気で、胸をはって呼び込みをしました。ひとつの教室をふたつに分け、一方にはパネルに絵や写真、文字を張って、救いの計画、最初の示現、モルモン経について

説明し、他方では、スライドルームにして教会のスライドや広島インスティテュートが製作した斉藤由貴姉妹のビデオを上演しました。初めは慣れずにパネルの説明などしどろもどろでしたが、数をこなしていくうちにコツをつかんで、一人一人個性のある自分の方法を確立していったようです。毎日入れ替わり立ち替わりたくさんの兄弟姉妹が助けに来ていただきました。皆さん本当に一生懸命、立派な即席宣教師として奮闘してくださいました。愛する友達が部屋をあちこちで証するのを耳にしながら自分の証を伝えるのは、本当に特別な経験でした。

5日間で、約600人の訪問者がありました。ムーン伝道部長の協力により、証を記したモルモン経300冊が用意され、そのほかに兄弟姉妹からのプレゼントの80冊とを合わせて380冊のモルモン経を配布することができました。アンケートには、「絵がきれいだった」「コンパニオンの説明がわかりやすく熱心でよかった」「モルモンについてよくわかった」との感想が寄せられまし

た。また、ある外大生は毎日訪問し、熱心に何度も説明を聞かれ、その場でレッスンを受け始め、2カ月後にバプテスマを受けられました。

コンパニオンとして、東京北と東京南ステーキ部から合わせて約60人の兄弟姉妹が働いてくださいました。ある姉妹は、伝道がこんなに楽しくて簡単なものだなんて知らなかったと本当に喜んでくださり、伝道活動は人々に教えることであるとともに、自分自身を清め、成長させるものであることがよくわかりました。

また、指導者の方々が心配してくださり、思いやってくださるのを見るときに、天のお父様がどんな思いで私たちを見守ってくださっているか、思い計ることができました。「この故に小さき羊の群よ、おそるなかれ。善を行え。」(教義と聖約6:34)

このモルモンパビリオンを開設するにあたり、助けてくださった多くの兄弟姉妹に心から感謝しています。(レポーター：東京北ステーキ部豊島ワード部伝道委員・星野浩美)

た。私は知恵が浅かったものですから、もし、このまま教会に来ていたら私の先祖が韓国人であることが皆に知れると思い、困っていました。しかし、教会に通い始めますと、多くの兄弟姉妹の温かい愛に触れ、また各集会で主のみ言葉を学ぶ内に信仰の芽が大きくふくらんでいきました。

改宗して半年たったころ、私は日曜学校教師として地域の指導者会に出席し、そこで指導をしてくださった兄弟と親しくなりました。私は彼と交際していく内に結婚を考えるようになりましたが、自分の先祖のことで、もしやこの結婚がだめになるのではと、このときも本当に悩み苦しみました。やっとの思いで彼に打ち明けましたところ、彼は教義と聖約第10章50-55節の聖句を読み、また人は皆、神の前に大いなるものであるとの聖句をあげました。その後、正式に結婚を申し込まれ、1974年にハワイ神殿で永遠の結婚の儀式を受けました。

主人はすでに8代までさかのぼって系図を調べ、神殿に送りましたが、私の先祖の探求は外国という煩わしさもあり、思うように進みませんでした。

ときどき田舎へ帰ったときに、両親に昔の話を聞こうとしましたが、帰化をして一日も早く日本人になりきろうとしていた両親に対しては、ためらいの気持ちがありました。それに機嫌の良いときは、韓国での子供のころの話をしてくれましたが、あまり進んで話そうとしませんでした。私は、そのときどきに聞いた話を少しずつ記録して、7年前に本籍地の役場へ手紙を出して戸籍を送ってくださるよう頼みました。しかし戸籍はすでに帰化しているために抽出するのに手間も時間もかかるので、待ってくださいという丁重で達筆な日本文の手紙が届きました。当時の私は、その達筆な日本文を手にしただけで胸が熱くなり、動悸を抑えることができませんでした。

父が亡くなってから、母は父のことや昔

系図探求の旅

——父の祖国(韓国)へ——

高松ステーキ部松山ワード部 三樹 世津子

私の両親は、まだ日本と韓国が自由に行き来できる昭和10年ごろに韓国から日本へ来た韓国人です。父は1986年4月3日に急病のため、満66歳の生涯を閉じました。50年間、一度も発展した祖国の姿を見ることもなく親族にも会わずに日本で亡くなりました。父は息を引き取る数日前に、「韓国のお母さんの顔が天井に浮かぶ」と言っていました。

私たち家族の生活は決して楽ではありませんでしたが、私が高校に入学するころ、両親は当時の中学校の先生の勧めや4人の娘たちの将来を案じ、子供には立派な教育を受けさせて早く日本人に負けないような人間になるよう教え、日本に帰化しました。

法律上は、日本の戸籍を獲得したのですが、社会的には様々な偏見と差別が続いていました。特に就職や結婚のときは大きな問題となり、教会に入る前に結婚の話もありましたが、なぜか途中でだめになりまし

た。しかし現在では、4人姉妹とも日本人の理解ある夫と家庭を築いています。日本と韓国の40年にわたる長く暗い歴史の中で、日本で生活している在日韓国人の中には苦悩している人々もいるのです。

1971年1月に、私はこの教会に導かれ、バプテスマのあとすぐに、支部長さんからこの教会には系図探求プログラムがあることを知らされ、大きなショックを受けまし



●三樹姉妹が訪れた父親の故郷
(金海郡進永面)



の話をするようになり、ある夜、押し入れの中からポロポロになった3通の手紙を私に預けました。それは25-30年前に父の兄から届いた手紙でした。父は返事も書かずに（というより書くゆとりがなかったのでしょう）ずっと持っていたのです。

その手紙はハングル文字で書かれていたために、私には読めませんでしたので居留民団の事務局長さんを訪ねて行き、そこで読んでもらいました。内容は、兄の長男が朝鮮戦争で亡くなり、大変気落ちしていることや、現在中風で寝たきりであること、そして日本にいる弟（私の父）を案じているので手紙が欲しいということでした。私は読んでいただいているのを聞きながら涙があふれてなりませんでした。

私は大切な父を亡くし、大きなショックを受けながら、この時になってやっと偉大な父の日本での生活を痛く思い知らされました。

本当に悲しいことに人はそれを失って初めてありがたさがわかるのです。そのころからどうしても父の祖国へ行き、糸図探求をすべきだという強い思いが、毎夜私を襲いました。1986年6月にこの熱い思いを教育部の西原雄二兄弟に話しましたら、すぐに管理本部地域監督の北村正隆兄弟に連絡をしてくださり、韓国の教会管理部の地区マネージャーであるハン・イン・サン兄弟に、そして釜山^{プサン}ステーク部長へと次々に照会があり、日本語のできる広安ワード部の李起栄兄弟（66歳）を紹介してくださいました。私は、李兄弟に何回か電話や手紙で事情を話し、昨年11月に訪韓することにしました。

役場へ行って除籍謄本を取りましたところ、父の兄と姉はやはりすでに亡くなっておりました。せめて父の生まれた地へ遺影とともに立ってみたいと夕方近くまで一軒一軒探し歩きましたが見つからず、最後に進永面の派出所へ行きました。署長さんが丹念に部下に指示して下さり、派出所か

ら役場へ電話をしたところ、父の兄の子供が釜山市内に居住しているということがやっと判明したのです。

翌朝7時に電話を入れ、従姉（44歳）に会うためにすぐバスに乗りました。もう胸がドキドキして何が何だかわからないような宙を歩いているような感じでした。

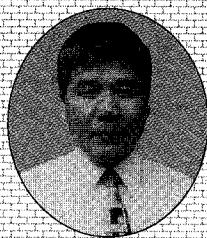
テレビで何回も見た中国残留孤児と肉親との対面のような光景でした。従姉と私は李兄弟がいるのも構わず、抱き合って泣き通しました。父の兄の子供が生きているというだけで感涙の連続でした。結局11人の従兄姉弟たちの内生存しているのは5人で、その内の3人とその家族と会うことができました。こうして肉親に会えたことにより、37人の先祖の歴史や消息、生活ぶり、性格、エピソードなどがわかりました。

私は系図探求の作業を実際に起こすまでに16年の歳月がたってしまいました。ま

た、学校へ通っていたころ、友達から「朝鮮人」といじめられて泣きじゃくりながら学校の坂道をかけ下りたつらく寂しい時代から、人生のまことの喜びと平安を得るのに30年近くかかりました。主は私を「銀のようにではなく苦しみの炉をもって」（イザヤ48：10）試みたけれどもヒラマンが息子たちに教えたように「贖い主の岩を基」（ヒラマン5：12）とした生活をするように努力してきましたので、悪魔の雹と暴風雨とが私を打っても倒れることはありませんでした。また、「先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心に〔私の心に〕その先祖を思わしめん」（教義と聖約2：2）ことを確かに教えてくださったのです。

釜山での一週間は実にすばらしい日々でした。従姉たちと別れる最後の夜、教会の話をしました。末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であること、神を信じて意義ある人生を送られるよう、子供たちにもそのように教えてほしいことなどを証しました。そして肩を並べて手を取り合ってその夜は一緒に休みました。

まことに「パウロわれらの先祖に就きて
言いたる如くわれらなくば彼らは完^まうせら
るること」(教義と聖約 128: 15)はないの
です。(みつぎ・せつこ 1944年生まれ、松
山ワード部インスティテュート教師)・



東京東ステーキ部松戸ワード部 鳥越 将人

私 は昭和53年8月19日、当末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗しましたが、そのきっかけとなったのは、テニスコートで背の高い、すこぶる美しい瞳をしたふたりのアメリカ人宣教師に出会ったことからでした。彼らふたりは私のところへ近づいてきて無料英会話のチラシを差し出しました。

私は興味があったので、次の週の英会話の日に教会に行ってみました。すると、そのふたりの宣教師が、それはそれは美しい笑顔で大歓迎してくれました。彼らの笑顔には何か光るものがありました。

そのうちにどうした拍子にか、回復された福音のレッスンを受けるようになりましたが、実はその5年前(昭和48年の夏)、私が聖書を読んでいたとき(私はそのころ、あるマンションの夜勤管理人のアルバイトをしていました)、ある人が「あなたは聖書をお読みですか。この本もキリスト教の本です。よかったらどうぞ。差しあげます」と言ってモルモン経をカウンターに置いていきました。そのとき、末日聖徒イエス・キリスト教会の名を初めて聞きましたが、キリスト教の聖典ということなので、感謝して受け取りました。

しかしながら少し読んでみて、リーハイ、ニーファイ、レーマンなど聖書にはまったく登場しない人名に面食らって、その後はまったく読まずに本箱の片隅にうっちゃっていました。そしてその聖典のことをすっかり忘れ去ってしまいました。

教会でのレッスンが進むに従って、なるほどこれは聖書に匹敵するイエス・キリストのもうひとつの証であり、これこそ私が高校2年のとき、初めて聖書を買求めて以来、20余年探し求めていた、まことの教会ではないだろうかと思うようになりました。モロナイ書第10章3-4節やエゼキエル第37章15-22節、黙示録第22章18-19節など幾度も読み照らし合わせ、暗記して黙想をし、宣教師たちに教わったとおりにお祈りすると、心の内に、本当に燃えあがる気持ちを抑えることができなくなりました。(教義と聖約9:8-9参照)

バプテスマを受けるために、ふたりの宣教師と一緒に電車とバスを乗り継いで、当時の東京第5ワード部へ行く途中、74歳で死去した実父の顔立ちや言動が心の中に深く思われて、思わず瞳がうるんできました。

当時はまだ神殿での儀式については、あまり詳しい知識はありませんでしたので、いつかは先祖を探索し、死者のためのバプテスマを受けよう、そうすれば亡き父をはじめ、わかるだけのご先祖様と、あの神々しい神様のもとへ昇栄できると思うと、何とも言えない感動を覚えました。

改宗してから先祖の探索を妹と共同で行ない、約半年かかって、男性57枚、女性48枚の系図を提出しました。私は先祖の身代わりのバプテスマを神殿で受けましたが、儀式の最中死去した父の笑顔がまぶたの奥に浮かび、按手礼を受け終わると、ほっとした気持ちと何とも言えぬ満足感を覚えたのを今でも覚えています。

私はこの回復されたまことの福音について確かな証を持っていますから、やがていつの日か、必ずイエス・キリストの贖いによる復活があり、ふさわしい生活をする限り私の先祖、子孫が日の栄の祝福にあずかれることを心から証します。私自身が私の先祖と子孫に先がけて改宗し、主の恵みにあずかるきっかけとなったことを心から感謝しています。

現在結婚して、愛する妻と息子との3人の幸福な日々の中、突然私は体調を崩し、入院、退院を繰り返していますが、希望を持って命果てるまで頑張っていきたいと思っています。

完成した神戸ステーキ部 明石ワード部教会堂 (1986年12月15日完成)

敷地面積: 679.2㎡
建築面積: 231.0㎡
延床面積: 640.23㎡



新教会堂 の紹介

〒651 兵庫県明石市硯町2丁目3-4
☎078(928)4367

心の内なる声

生命の疲労が
数時間の熟睡によって
すっかり拭い去られた朝
大空を仰いで胸いっぱい深呼吸をする
心の内に静かなる神の声あり

生命の躍動が
まだ知らざる自分の開拓に勇みて
渾身の力をこめて鋌を振るう午後
荒野の中で吹き出る汗を素手で拭う
心の内に励ます父の声あり

生命の孤独が
萎縮した心の片隅に
ぼつかりと大きな空洞を造る夕べ
熱い涙を流して美しい星空を見あげる
心の内に勇ます友の声あり

生命の迷夢が
ぼくの情熱を凍結させて
生きる張り合いを失わせようとする夕闇
道に迷いて手に掲げし
蠟燭の火を吹き消そうとする
心の内に温かい師の声あり

生命の満足が

血管を通してひしひしと
全身の隅々までしみわたる夜
静かに瞼を閉じて
柔らかない寝床の上に長々と横たわる
心の内にやさしい母の声あり

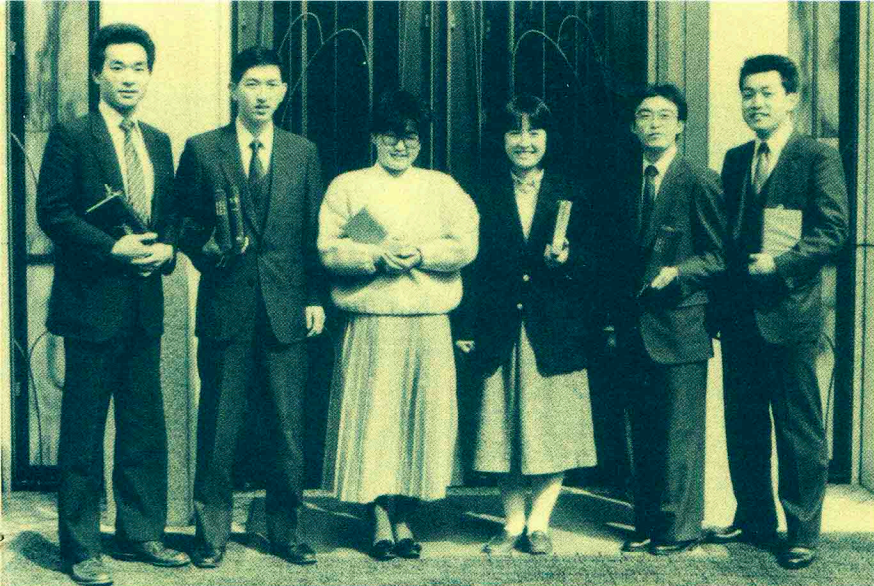
生命の感謝が
生かされている喜びで満たされ
神秘なる夢幻の世界へ
誘い込もうとする夜更け
そつと目を開いてほのかな光のなかで
すすめた天井を見つめる
心の内に確かなる神の声あり

(とりごえ・まさと 1941年生まれ)

編集室から

●心に残った記事の感想文、各地の話題や行事、「日々の恵み」コーナーの証、「職業と信仰シリーズ」、カットなどをお送りください。7月号掲載分の締切りは5月11日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)、教会での責任(役職名)、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しすることがあります。

●あて先: 〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264



②月に召されたJMTC 第93期生6名の名簿

S:ステーキ部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

(写真左より)

<名 前>	<出身地>	<伝道部>
1. 笠井達也	新潟D/長岡B	神戸伝道部
2. 辻野茂樹	大阪北S/豊中東W	神戸伝道部
3. 久保公利栄	広島S/光W	名古屋伝道部
4. 山本利江	東京北S/豊島W	名古屋伝道部
5. 小高忠文	高崎S/桐生W	岡山伝道部
6. 橘 輝	大阪北S/京都洛北W	福岡伝道部